
大切なモノのために

++

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大切なモノのために

【Nコード】

N4206Z

【作者名】

十十

【あらすじ】

大切なモノを守るためならなんだって犠牲にする。
それが俺の生き方だ。

プロローグ

闇夜に浮かぶ幾多の摩天楼。

いま俺が視界に捉えているその光景は、夜空に瞬く星そのものようだ。

逆に、夜空自体には星が一つたりとも存在していない。……温暖化とかフロンガスとかが関係してるのかもな。

結構どうでもいいことを考えながら、俺は腕時計を確認する。

午後一時二六分。

予定時刻まであと少しと迫り、俺の胸はだんだんと高鳴ってきた。時計の力チカチと動く針を見ていたらさらに緊張してきたため、俺は時計から摩天楼に目を戻す。

うん、やっぱりいい眺めだ。俺がいるのは地上一〇〇メートルに位置する屋上で、ここから見える景色は俗に言うあれだよ、あれ……そう！一〇〇万ドルの夜景って奴だ。見るからに金かかってそうだもんな。……ってあれ？一〇〇万ドルの夜景の意味って、金のかかった夜景ってことでもいいのか？……ま、どうでもいいや。

にしても寒っ！Tシャツと短パンなんかでこんな場所に来るもんじゃないな。まだ九月の上旬だからって甘く見てたぜ……。うう……寒っ。

地上ゼロメートル地点とはまったく異なる突風吹きすさぶ中、俺はその場で駆け足をしなごらもう一度時計に目を向けた。

午後一時二九分。

「そろそろだな……」

俺がこんな寒空の下にいる理由は、一分後にやらなければならぬいことがあるからだ。

そのことを考えると、また緊張が湧き上がってくる。寒さと相まって、俺の体は小刻みに震えだした。あ……これはちょっとヤバイ。手元がブレるかも。

しかしそうも言ってもらえない。これは絶対にしくじれない仕事なんだ。もしも、もしもしくじれば、俺自身が危うくなるかもしれない仕事なんだよ……。くそつ、また震えがきつくなっただぜ……。

「……落ち着け、落ち着くんだ、俺」

呟きながら、俺は仕事道具を掴む。三脚によって固定されている狙撃銃を。

「大丈夫、大丈夫だ……」

自分に言い聞かせるように言葉を発し続けながら、俺はすでに倍率も標準も合わせてあるスコープを覗く。

スコープが映しているのは、とあるビルの会議室のお偉いさんが座る席だ。

さみい……くそつ、早く来いよ。これ以上体温が下がると精度が落ち 来た……っ！

心で愚痴をこぼしていると、裕福そうな強面老人がスコープの中央に現れた。と同時に毎度のことながら、俺の中に残る僅かな良心が津波のように押し寄せてくる。

こんなことしていいのか？

こんなことしてなんになるんだ？

こんなことして正しいのか？

こんなことして誰か悲しまないか？

こんなことするのは間違ってると思わないのか？

こんなことこんなことこんなこと……こんなこと……こんな……

……いや違う！ これは何不自由なく暮らすためなんだ！ 生きるためなんだ！ ……でもそんな自分勝手のために……俺は人をころ

……違う！ 違うんだ！ これは自分勝手じゃない！ こうしてくれって頼む人がいるから、俺はそうして欲しい人のためにやっってるんだ！ 自分勝手じゃなくて誰かのためだ！

でも、それが自分勝手につながるんじゃないのか？

違う！ うるさい！ もう何回もやってることだろ！ いい加減にしないと……こんな感情はもう失くさないと……。非情になれ。

「ハア、は、ハア、はあ、ハあ」

俺はとにかく走って走って駆け下りる。

そうして、途中何度かコケそうになりながらも無事に地上まで走りぬいた俺は、何事もなかったかのように街へ溶け込む。

ここは大都会。地上まで下りてしまえばこちらのものだ。もう次の日になるつかという時間帯だが、人はまったく減らない。むしろ増えているような気がしないでもない。ブロンド超絶美人にマッチョな黒人、俺と同じ年ぐらいの少女が男と歩いたり、紛れ込むにはもってこいだ。

ちなみに、銃はギターケースの中に入っているからバレはしない。俺はいま、どこからどう見てもバンドの練習帰りのガキだ。リズムでも刻むかのように頭を振りながら歩く。

しばらく進み非常階段から結構離れたところで、俺はギターケースの肩紐を気にかけるフリをしながらちよつとだけ振り返ってみて

「うわっ……」

顔をしかめにしかめた。

なんでかって言うと、さっきまで潜伏してたビルの下にどう見ても一般の方ではない黒服の男たちが数人いらっしやって、獲物を探すハンターみたいに辺りをキョロキョロと見回していたからだ。直立不動で屋上の方を見上げている奴もいる。

ふう……危なかったあ、今回はマジでギリギリセーフだったぜ。あと何十秒と遅かったら俺はいまごろ……蜂の巣で作ったオブジェみたいになってただろうからな。

「はあ……」

俺は肺にためていた空気を全て押し出すように息をはいた。これはため息じゃない。心からの安堵を表現したんだ。

危険な仕事もこれでとりあえずは無事に終了ってわけだからな。

さてと、あとは帰るだけだ……。

愛しいあいつが待ってる家にな。

腕時計で時間を確かめると、すでに一時を過ぎていた。

俺は閑静な住宅街の中を歩いている。まあ、一時を過ぎればどこも大抵は閑静なんだろうけどな。

と、そんなバカな事を考えていると我が家が見えてきた。いや、正確には家っていうか道路に出てる看板が見えてるだけだ。

『ストルス雑務店』っていう看板。

俺の家は自宅を店舗に自営業をやってるんだ。

雑務店っていうのは、要するに何でも屋。

本当は父さんと母さんが営んでただけど、その父さんと母さんは一年前に事故で死んでしまった。以来、俺が継いで営業している。

あ、そうそう。言っておくけど、殺し屋っていう仕事は俺が勝手にやり始めたことで、父さんと母さんは人殺しなんかじゃないからな。

父さんと母さんは、ただ近所の人たちの助けになりたいっていう志の下に何でも屋を始めただけなんだ。だから、父さんと母さんに変な思いを抱かないで欲しい。

蔑むなら俺だけを蔑んでくれ。父さんと母さんの店を汚してしまつたのは、紛れもなく俺だから。

だから、父さんと母さんに対して、心の底から申し訳なく思ってる。悪いこととしてごめんなさい、人の道を踏み外してごめんなさい、店を汚してしまつてごめんなさいって。

悔いても悔いても悔やみきれないほどに申し訳なく思ってる。

だったら殺し屋なんかやるんじゃないやねえよって思うかもしれないけど……でも、そうしなければならなかった。……でないと生きられなかった。

父さんと母さんが生きている時、つまり、何でも屋を大人二人で切り盛りしている時ですら、家計がそれなりに厳しかったんだ。

なのに、父さんと母さん、大人二人が死んで、俺一人でやり始めたらどうなったと思う？

生活できなかったよ。

俺だけじゃできることも限られるし、そもそも当時中等部だった俺に依頼しようとする奴なんて一人もいなかった。

かなり苦しい日々が続いた。……それが俺一人ならよかつたさ。でも、俺には妹のリールがいるんだ。だから、そのリールのためになんとかしないとって俺は考えて、それであちこちから色んな情報をかき集めた。なんでもいいから金になるようなことを必死に探したんだ。

そしたらあつた。この時代にも殺し屋っていう仕事がある。

最初はやるうかやらないかでもの凄く葛藤したことを覚えている。けど、いま現在の俺を見てもらえば分かる通り、俺はその殺し屋っていう仕事をやることにしたわけだ。

いまでも鮮明に思い出せる。

最初のターゲットをナイフで突き刺した時のことを。罪悪感で満ちたことを。でも、口座に結構な額が振り込まれているのを見て

思わず笑ったことを。

ハハッ、俺はもう堕ちてるんだ。

ダメ人間なんてもんじゃない。もう壊れに壊れて破綻しまくってる。

こんな奴、ホントならリールのそばに居ていい人間じゃない。

でも、俺がいないとあいつはどうなる？

きっと、いや絶対に一人では暮らせない。だってさ、リールはまだ小六なんだぞ？ 生活力なんていまはない。

だから俺は、自分が破綻していると分かりながらもあいつのそばにいる。あいつに何不自由ない生活をさせてやるために、俺はそばにいる。これからもそばに居続ける。

それにさ、リールは俺の原動力なんだ。リールがいるから、俺はなんだってできるんだ。逆にリールがいなければ、俺は何もしない

かもしれない。

と、色々考えながら歩いてみると、家の玄関前まで到着した。

さあて、その原動力にもうすぐ会える。俺はほころぶ顔を抑えられない。

玄関の鍵を開けた俺は、もの凄い小声で「ただいま」と言いながら家に踏み込んだ。もちろん返事はない。というよりあつたら困るなるべく音を立てないようにしながら、俺は二階の自分の部屋へと向かう。

真つ暗な自室にたどり着いた俺は、ギターケースを隠し収納スペースにしまうべく棚をスライドさせる。……スライドって言ったけど、ホントは押しでずらしただけだ。一冊の本をスイッチ代わりにしてウイーンって開くとかじゃないからな。

まあそれはさておき、俺は眼前にお目見えしている隠し収納スペースにギターケースを立てかける。ギターケースを収納できるぐらいには大きな空間だ。おおよそロッカー二つ分ぐらいだ。

ここには他にも殺しの道具が隠してあったりする。例えばスタンダードにサバイバルナイフとか、電圧を異常なまでに高めたスタンガンとか、あんまり使わないけど普通のハンドガンもある。武器だけじゃなくて睡眠薬なんかの薬物も揃えている。

俺も一応は殺し屋だからな。それなりに道具集めはしてるってわけさ。けど、今後は特に増やす予定もない。大体は狙撃銃でカタがつくからな。

「んぐっ……」

ズズズツと、用が済んだので棚を元の位置に押し戻す。

隠し場所がそんなところで大丈夫なのかと思うかもしれないけど、心配には及ばない。この家には俺とリールしか住んでないし、そもそもリールにはこの棚をずらす力はないだろうし　　ってそうだ、その華奢な体を拝みにいかないと。

俺は抜き足でリールの部屋へ向かう。

あんな汚い仕事をしたんだ。可愛い妹の顔を見て色々相殺しない

とやっつてられないって話だ。

リールを起こさないようにと、俺は慎重にドアを開けて忍び足でベッドに近づき 目を見開く。

「……ああ、可愛い」

数時間ぶりに見たリールはとても、それはもう凄まじいほどに愛らしい。

金色の艶やかな長い髪。いまは閉じてるから分かんないけど、開くとめちやくちやくりつとして猫みたいに大きな愛おしい目。小柄な身体は白を基調としたパジャマに包み込まれている。

外見だけ見ると、天使みたいでどこか大人しそうに見えるんだけど、それはまったく違うんだなあ。実際は凄く天真爛漫で、この姿とのギャップが最高だ。タオルケットを蹴飛ばしてるのがまた可愛いらしいじゃないか。

俺はそのタオルケットを腹にかけてやり、「おやすみ」と呟いてからリールの部屋を出た。あんまり長居して起こしても悪いからな。それに長居なんてする必要ないんだ。俺はリールの顔をチラッと見るだけで、それだけで何もかも忘れられるんだ。嫌なことでもなんでもな。それに、俺はそれだけで活力がもらえる。さっきも言ったけど、リールは俺の原動力。いや、原動力なんて表現じゃ収まりきらない。もう端的に言っただけだ。

リールは俺の全てだ。

これは大げさでもなんでもなく、どうしようもないほどに本当のことだ。少し気持ち悪いかもしれないけど、俺としてはどこまでも大真面目な表現だ。

だって、俺はあいつのためならなんでもする。なんだってできる。それを証拠に、俺は人を殺してるだろ？ リールに不自由な思いをさせたくないから、頑張って人を殺してるだろ？ もちろん……これからも殺し続けるつもりだ。

俺は……俺はリールのためになるのなら、墮ちるところまで墮ちてやる。俺一人おかしくなるだけでリールが救えるのなら、俺はどこまでだって墮ちてやる。

「……あつ！」

そこまで思考したところで、俺はいまりールの部屋の前にいるというのを思い出す。

くそつ！ バカか！ 何やってんだ俺は！ リールの部屋の前で汚いことを考えるなって言ってるだろうが！ リールを穢すな！ 自分に喝を入れながら、俺は急いでリールの部屋を離れる。

ふう……これでよし、と。

さて、俺は殺し屋である前に、ただの高校生でもある。当然ながら明日も学校だ。あーイヤだイヤだ。殺人休暇って制度を導入してくれないもんかねえ。……冗談だから気にしないでくれ。

それはそうと、早いとこシャワー浴びて寝るとするか……。

そのあと俺は、いま言った通りにシャワーを浴びてからベッドにもぐり、あつという間に夢の中へと落ちていった。

人を殺す、という行為をした日は、いつも大体こうして終わる。

一章

一章

「うお……っ！」

俺は腹部にももの凄い衝撃を感じて眠りから覚める。だが、これがなんなのか分かっているの、俺は焦りもせず目を開けるよりも先に声を発した。

「おはよう……リール……」

「おはよう！ フィー兄ちゃん！」

リールの弾むような無邪気な声。俺は毎朝毎朝こうして起こされる。うらやましいだろ！

ちなみに、リールは俺のことをフィーと呼んでいるが、俺の名前はフィーニツトだ。

「早く起きなきゃダメだよ。早く早く〜」

言いながら、リールは俺の腕を引っ張る。

……ああ、幸せだ。リールの力強い引っ張りのせいで俺はベッドから床に落ちたけど、そんなことは怒る材料になんてならない。むしろ微笑ましい限りで、俺の顔は自然とほころぶ。

と、なぜか分からないけど、リールが初等部の制服のスカートを急に押さえ始めた。

どうしたんだろっ？ と思っていると、リールが顔を赤くしながら言葉を発してくる。

「ふい……フィー兄ちゃん……わ、私のスカートの中見て笑った……」

ああ、なるほど。俺の微笑みをパンツを見て笑ったと捉えたのか。つたく、俺はそんなに変態じゃないぞ。

「いいかりー」

「い、言い訳なんか聞かないもん！ えっちえっち変態！ フィー

兄ちゃんのバカアホ間抜けっ！」

可愛らしくぷくうと頬を膨らませながら、リールが悪口の限りを吐き出してきた。

くっ……反抗期か！ だがしかし、俺にそんな罵倒は効かない。怒ったリールすらも愛しく感じるんだからな。

俺はますます顔をほころばせた。

「わ、私のスカートの中を思い出して笑ってるんだね！ ふい、フイー兄ちゃんなんかもう知らないもん！」

俺の笑顔は変態っぽいのだろうか。リールはそうはき捨てて、俺の部屋から出て行った。その後ろ姿も可愛いらしい。

「……見てないんだけどな」

リールの背を見送りながら、俺は苦笑いを浮かべて立ち上がる。

そもそもリールのパンツなんて、俺は洗濯物として干してあるのを散々見てるんだけどな。……やっぱり穿いている物を見られるのは恥ずかしいのだろうか？ ……そういえば、水着は見せるものだから恥ずかしくないが、下着はあくまで下着だから恥ずかしいとか何とか誰かが言ってたような……。

俺があごに手を当てながら考えていると、開けっ放しの部屋の入り口からいい匂いが漂ってきた。

どうやら、すでにスリイナが来ているようだ。 あ、スリイナ

っていうのは、スリイナ・フォシルニクスって言う俺の幼なじみのことだ。いいとこのお嬢さんで、俺の家のすぐ近くにある大きなお屋敷に住んでるんだ。

スリイナのお屋敷には、俺がまだ人殺しに手を出す前、父さんと母さんが死んだ直後に少しのあいだけ世話になったことがある。そうなった経緯としては、俺とスリイナが幼なじみだからということも当然あつただけけど、もっと大きな理由として、俺の父さんとスリイナの親父さんが昔からの知り合いだったっていう要因もあつたんだ。その頃は俺もリールも暗く沈んでた時でさ、正直な話、あの時スリイナのお屋敷に呼ばれなかったら、俺たち兄妹はあと追い

自殺でもしてたかもしれない。だって、父さんと母さんがいきなりこの世からいなくなっただぞ？ そうなるのも無理はないって思わないか？

……ま、そんな辛気臭いことはさておく。

とにかくだ、スリイナはいいとこのお嬢さんで、俺の幼なじみで、お嬢さんのくせに料理ができる、なんとも不思議なほんわか少女だ。で、そんなほんわか少女は今日も朝食を作りに来たらしい。別に頼んでるわけじゃないんだけど、やっぱり父さんと母さんがいないことを気遣ってくれてるらしいんだよ。まあ、俺としては作ってくれてもくれなくても、どっちでもいいんだけどな。……いや、あれだぞ？ 作ってくれることに関してはありがたいとは思ってるぞ？ 当たり前前だけど。

それで話はちょっとばかり変わるんだけど……スリイナも当然、俺が人殺しだということは知らない。

つまり、俺は自分が殺し屋だつてことを誰にも言っていないってわけね。だからって、理解者がいないから辛いとかってわけではないけどな。どっちかって言えば誰にもバレたくないし。……ってそりや当然か。

なんてことを考えたのち、俺は部屋を出た。

これはなんの匂いかな？ 階段を下りながら、俺は鼻をくんくんさせる。……分かん。

朝食の材料はスリイナが自宅から持ってくるんだ。だから、家の冷蔵庫の中身を把握していてもどんな朝食が出てくるかは分からない。でもま、それがまた面白いんだけどな。

だって驚くなかれ、こないだは朝からキャビアさんが出てきたんだぞ。どこの高級ホテルだ！ ……って思わず突っ込んだものだ。

でさ、俺がそう突っ込んだら、スリイナの奴なんて言ったと思う？

『こんな的高级じゃないよ？』

だとさ！

生まれも育ちも違っつていうのはまさにこれだ！ ……と痛感した出

来事だったぜ……っ！

ちよっと苛立ちながらリビングの手前までやってきた俺は、さてさて今日はどんな食材を持ってきやがったのかなぁっと思いつながらリビングを覗いて

「……………は？」

俺はリビングに入ることをやめ、廊下で深呼吸を開始する。

あいつ……またやってくれたよ……。とんでもないもん持ってきやがったよ。写真とかでしか見たことのないもん持ってきやがったよお！

いやいやちよい待て……あんなもん一体どこで作ったんだ？

スリイナはいつも我が家の狭苦しいキッチンで朝食を作るのだが、あれを作れるほどの機能、うちのキッチンにはなかったと思う。

ということはだ、スリイナの奴……あれを自宅から持ってきたってことか？ フォシルニクス邸から一〇〇メートル近く離れた俺の家まで、スリイナはあれを持って歩いてきたってことなのか。バカかあいつは！

それに俺ってば、朝はシンプルにいきたいんだよね。パンでいいんだよ、パンで。なのに、なのに……何あれ？ なんで朝っぱらから油で揚げたもんを食わなきゃいけないんだ。

イライラが増してきた。俺は文句を言うため、リビングに踏み込む。

「おい、スリイナ！」

「あ。フィー、おはよう」

穏やかな目を緩めに緩めて、スリイナが挨拶してきた。……だがな、俺は挨拶どころじゃないんだぜえ！

「おはようじゃねえ！ なんじゃあこりゃあ！」

俺は例のモノを指差しながら声を荒げ、スリイナを見据える。

俺たち兄妹よりも色素の薄い金髪、それを肩の辺りで切り揃えてウェーブをかけた髪形。雪のように白い顔はおっとりとしていて、見る者に癒しを振りまく。いまの俺は癒えないけどな。身体は平均

よりは少し上ぐらいだと思う。まあ、発展途上ってところだ。で、その発展途上の身体の上に高等部の制服を身に着けている。

そんなスリイナは俺の声にビクツとしながら、

「……何って、北京ダックだよ？」

例のモノの正体を口にした。

そう、そうなんだ！ こいつは北京ダックなるものを持ってきやがったのだ。おかしいだろ？ 朝食に北京ダックっておかしいだろ？ 本場中国の人でも食わないと思う！

「……何って、北京ダックだよ？」

俺が内なる世界で突っ込みを繰り返しているあいだだろうと、現実世界では時が流れ続ける。

スリイナは、俺のそんな心中突っ込みを沈黙として受け取ったらしい（まあ当然だけど）。大事なことなので二度言いました風にもう一度北京さんを紹介してきた。

「あのな、そんなのは見れば分かるわ。俺がなんじゃあこりゃあ！ って言った理由は、なぜにこれを朝食としてチョイスしたのかってことだよ」

そこはぜひともお答え願いたい。北京ダックはどういう経緯で朝食にセレクトされたのか。個人的にとても気になる。

俺に尋ねられたスリイナは、若干申し訳なさに言葉を紡ぎだす。

「あのね、昨日の余りなの……。ごめんなさい」

「な……っ！ あ、余りだとお……」

俺はそれ以上言葉を続けられない。

なんだって？ ペ、北京ダックが余るってなんだ？ どういうことだ？ 一体どんな食卓だったんだよ、昨日のフォシルニクス家。

……まあ、でも、余りなら仕方ないかもな。捨てるのはもったいないし。

貧乏気質な俺は、余りという言葉に弱い。もったいない精神が底から湧き上がってきた。

「スリイナ、謝るな。別にいいって。こんなもの食べるっていろいろ

は逆にありがたい。高級なことに変わりはないんだからな。余りで結構コケコッコーってな」

そう、俺は最初ギヤーギヤーとわめいていたが、これは立派な高級料理。何を文句言う必要があるってんだって話だ。

「そう？　ならよかったあ……………」

ライ麦畑のように穏やかな笑顔を浮かべるスリイナ。　さてと、スリイナの顔に笑顔が戻ったことだし、さっそくいただきますをしよう　と思つてやめる。

リールが食卓にいないじゃないか！　どこに行つたんだ……………つて　そういえばさつき、リールの部屋のドアが閉まつたような気が……………。つてことはもしかして……………まだ俺にパンツを見られたつて誤解してるのか？　それで恥ずかしくて部屋に閉じこもつてることなのか……………？

うん、まあ、多分そうだろうな。リールは大雑把に見えるけど、以外に繊細な子なんだ。……………つたく、ホントにしょうがない奴だな。けど、そういうところが可愛いんだよな。

「じゃあ俺、ちよっくらリールのこと呼んでくるからな」

「うん、分かった。でも冷めちゃうと美味しくなくなるからね」

あ……………確かに、冷えた鶏肉つていうのはあんまり美味くなさそうだな。

「よし、分かった。即行で戻ってくる」

俺は返事を返してリールの部屋へ向かう。

はてさて、どうやってリールを部屋の外に出そうか？　怒鳴つて引きずり出すのは論外だし……………じゃあ謝るか？

……………んー、パンツを見ていないのに謝らなければならぬってことに対して少し不満を覚えなくてもいいけど……………でも、リールの顔をこのまま見られないのつていうのは、もつと問題だな。

「うん、謝ろう。そうすれば全てスムーズに済むはずだ」

方針を固めた俺は、目の前に迫つたリールの部屋のドアを見て、一度だけ深呼吸。

それから、俺はリールの部屋のドアを二回ノックした。

「おい、リール。出てきてくれないか？ 俺が悪かったよ。ごめんな。兄ちゃんに顔を見せてくれないか？ ちゃんと謝りたいんだ」
どこまでも優しいトーンで呼びかけると、

「……ほんと？」

ドアの向こうから、どんな楽器よりも素晴らしい音色が聞こえてきた。ああ、ウィーン少年合唱団よりも綺麗な声だ。俺は聞き惚れながら言葉を返す。

「……ホントだとも。大体、なんで俺がリールのパンツを見てニヤけなきゃいけないんだ？ リールのパンツなんて洗濯物で見放題だぞ？ とつくの昔に耐性ついてるから、俺はいまさらニヤけたりしないぞ？」

「フイー兄ちゃんなんか死んじゃえばいいのに！」

「え？ いまなんて」

なんかリールの口から汚い言葉が出たような……。

「だーから！ フイー兄ちゃんなんか死・ん・じゃ・え・ば・い・い・の・に！」

「ぐうあ……し、し死んじゃえばいいのに、だと……？」

な、なんでリールは怒ってるんだ？ お、俺は何か間違ったことを言ったのか？

「り、リール？ 俺はほんとにニヤけてないんだぞ？ というより実を言えば、さっき兄ちゃんはリールのパンツを見てないんだ。ホントなんだ信じてくれ！」

「そ、そういうことじゃないもん！ 私の洗濯物のパンツ、その、見てるって……も、もうホントに知らないもん！ フイー兄ちゃんの色情狂！」

し、色情狂……。俺、いまリールに色情狂って言われた？ け、けどなんか、あんまりダメージを感じなかったぞ。……うん、リールにそういう扱いを受けるのも結構いいかも。あは、あはははは
って、いやいやいやいやいやちっが　　う！ 早くリールの

顔を見たいんだろ！ 俺はいま、何に目覚めようとしていた？ あ、危なかった……。危うくダークサイドに堕ちるところだったぜ。

……いや……。まあ……。もう堕ちてるんだけどな。

でも、いまはそれをさておくことにして、そろそろ本気で謝らないとこれはマズいな。

俺はリールの部屋のドアに向かって誠意を込めて頭を下げる。

「リール。本当に悪かった。女の子なんだからパンツ見られるのはイヤに決まってるもんな。なのに、俺はなんにも分かってやれなくて、むしろ傷つけることばかり言っちゃって……。まあ、その、とにかく謝るよ。ごめんな、ホントにごめんな。俺が全部悪かった！」
かなり真剣な調子で、俺は謝罪を述べた。

と、目の前のドアがギィ……。と音を立ててほんの少しだけ開いた。俺は腰を直角に曲げる形となっているので、リールがどんな顔をしているのかは分からない。けど

「フィー兄ちゃん」

さっきまでの怒った口調じゃなかった。いつもの無垢で可愛いリールの声だった。俺はホッと一息ついてから、「なんだ？」と頭を下げてたまま尋ね返した。

「あのね……」

言いながら、リールは部屋のドアを最大まで開く。

依然として俺は床を見たままだが、リールの足が俺に近づいてくるのが見える。……。何されるんだろ？ もしかして頭なでなで？

いやいや、なんでそんなことされるんだよ！

こんな状況にも拘わらず、セルフノリ突っ込みをしている俺。

対しリールは、そんな俺を戒めるかのように勢いよく部屋から飛び出してきて

「えいっ！」

なんとも可愛らしいかけ声とともに俺の両肩を押してきた。

押された俺は、唐突過ぎたために身構えることもできず、そのまま後ろにひっくり返ってしまう。まるで、凄腕の武術の使い手にわ

けも分ならず倒されたかのような感覚に陥ってしまった。

「えへへっ、早く朝ご飯食べよ？」

リールは、それで許したからねと言わんばかりのしてやったり顔で俺を見下ろしてくる。

……やっぱり、リールはそういう笑顔が一番だ　って、あぁっ！

「ん？　フィー兄ちゃんどうしたの？」

「い、いや！　なんでも！　それよりもあれだよあれ！　今日の朝食は冷めないうちに食べた方が美味いってスリイナが言ってたぞ？　だからほら、リールは早く行きなさい」

「……変なフィー兄ちゃん。でもいいや！　朝ご飯！　朝ご飯！」
いつもの元気な声を発しながら、リールはスタスタと階段を下りていった。

「ったく、リールは最後の最後で甘いなあ……」

俺はこらえていた苦笑を表に出した。

だってリールの奴、最後の最後、仰向け状態の俺の眼前に立っただんだけ？　どうなったかは察しがつくだろ？

そう、今度こそ俺は、おもいつきりリールのパンツを見てしまったわけだ。

ちなみに白でした。

というより白しか持ってません！

毎日洗濯機回して、毎日洗濯物干してる俺が言っただから間違いない！

リールのパンツを目撃してから二分後、俺は食卓にいた。無論、朝食のためだ。

食卓は一度に四人までが使用可能な、まあ、つまりは至って普通の四角いテーブルだ。席は俺とリールが並んで座ってて、スリイナは俺の対面。

この通り、俺たちはもう完全に席へと着いている。けど、まだ北京ダックさんを口にしてはいない。

スリイナによる、北京ダックさんの正しい食い方講座が開かれているからだ。

なんでも、北京ダックさんは皮だけを食べるらしい。そいだ皮とネギとタレを薄い生地みたいな奴にくるんで食べるんだとさ。オサレだことオサレだこと。庶民には無縁の食べ方だな。

「説明はこんなところかな。さあ、もう食べてみていいよ」

北京ダックさん講座が終わったようなので、俺はさっそくいただいてみることに。

えーと、この薄皮の生地……ダックさんの皮と千切りされたネギ、それとタレを乗つけて……あーん。

俺は完成系を口の中へ運んでみた。

「……あ、美味い」

フィーニット・ストルス、一五歳。食の階段を一段上る。うむ、北京ダックさんとはこれからも末永くおつき合いたい！
そう思えるほどに、北京ダックさんは美味かった。

リールも「おいしい！」と言っている。

俺たち兄妹の反応に、スリイナは胸を撫で下ろしていた。

そのあと俺は三つ、北京ダックさんを口にした。そうして朝食が終了したわけだが、俺は食卓の中央に君臨する裸のダックさんを見つめていた。

「フィー、どうしたの？」

ダックさんを見据える俺に対して、スリイナが小首を傾げながら尋ねてきた。

「いやさ、この身包みをはがされたダックさんはどうなるのかなあ
って思ってたな」

ダックさんには、まだ美味そうなお肉部分が残りに残っている。

「うーん、まあ……食べられるけど、普通は、もう食べない……かな。何かに加工しないと味ないしね。これは捨てようと思うんだけ

ど……ダメかな？」

「え？ もつたいなっ！ 味なくったってタレにつければいいじゃんか！」

あまりにも悲惨過ぎるダックさんの末路に、俺のもつたいない精神が騒ぎ出した。

「じゃあいま食べる？」

「あ、いや、それは……」

俺のもつたいない精神はどこへやら。正直、もうダックさんいらない。俺って、朝はそんなに腹が減らない方だからな。これが夜なら喜んで食ったかもしれないけど。

でもだからといって、これを夜食うのかと聞かれると、それもちよつとあれだな……。

だってさ、この状態のまま保存してたら……なんとなくだけど、悪くなりそうじゃないか？ 冷蔵庫に入れてたとしても、ダックさんは身がむき出しだからさ。なんとなく食べる気が起きないっていうか……ね？ 分かるでしょ？

だから、ダックさんの末路は……

「……スリイナに託す」

「分かった。じゃあ私、一回家に戻るね」

スリイナはダックさんの皿を両手で持って、リビングを出て行った。

さよなら、ダックさん……っ！

ダックさんに哀悼の意を捧げ、それから俺は自分の部屋へ向かった。制服に着替えるためだ。

俺はマジシャンもびっくりするほどの速さで着替えをした。

嘘だけど。本当は二、三分かけてゆっくりと着替えました。

そのあとは勉強道具をカバンに詰めて、あーあ学校ヤダめんどいつて思いながら再びリビングへ。

どうやら、まだスリイナは来ていないようだ。けど、もういつもの登校時間になったので、俺は毎朝の日課をしてから外へ出ることに

にした。そうすればスリイナもちょうどよく来るんじゃないかと思う。

で、その日課とはなんぞやと言えば、父さんと母さんの遺影に挨拶をすることだ。

「リール！」

父さんと母さんへの挨拶はリールと一緒に言う。もう何ヶ月と続けている、俺たちの日課中の日課。欠かせない朝の行事といったところだ。

リールもこの時間になると呼ばれるってことが分かってるんだろ。うな。すぐに俺の下へと駆けてきた。

そうして、俺たち兄妹は並んで父さんと母さんに黙祷を捧げる。

俺は軽く目を閉じた。

……父さん、母さん。人殺しなんかしてしまつてホントにごめんなさい。でも、リールのためなんだ。リールに何不自由ない生活をさせてやるためなんだ。……つて言つても怒るよな……。いや、それはそうだよ。俺は人殺しなんだから。怒られない方がおかしいんだから。でも、でもさ……。罪なんかあとでいくらでも償うから……。だからいまだけは、いまだけはこのまま……。見守つて欲しい。せめて、リールが大人になるまでは……。このままでいさせて欲しい。父さん、母さん……。毎回毎回こんなわがまま言つてホントにごめんでも絶対に、絶対にいつか償うから、だからいまだけは許してくれ……。

いつもと同じことを思つたのち、俺はゆっくりと目を開く。

「……行くか」

「……うん」

静かなやり取りを行ったのち、俺とリールは外に出た。

すると予想通り、ちょうどよくスリイナが俺の家の前に到着したところだった。

俺たち三人は、いつも通りに学校へと出発する。

今日はよく晴れた日だ。雲なんて一つたりともな あった。こ

めんあつたわ。一つだけあつたわ。なんかダツクの形した雲あつたわ。

俺は何気なく、その雲に向かって十字を切る。……アーメン。でもまあ、それでも快晴なことに変わりはない。実にすがすがしい。

いつもと同じ通学路を歩きながら空を見上げていた俺は、そう思った。

それから、俺は空に向けていた顔を自分の左右へ向けた。左にはリールがいて、右にはスリイナがいる。

なんで小学生のリールが俺たちと一緒に登校しているのかと言えば、通う学校が同じ敷地内に存在しているからだ。

リールは初等部六年生。俺とスリイナは高等部一年生だ。

まあ、いわゆるエスカレーター式って奴だ。生活が苦しかったっていうのは、このせいでもある。学費がバカみたいに高いんだよ。でも、人を殺すようになってからはだいぶ楽になった。というよりも、殺しに手を出していなかったら、俺たち兄妹はここに通えなくなっていたと思う。

だから俺は、人を殺したことを後悔してはいない。裏世界に手を出して良かったと、まだ慣れないところもあるけど、大方そう思えるようになってきている。っと、またリールの隣でこんな汚いことを考えてしまった。ダメだダメだ。別の話題に別の話題っと。えーと、何かないかな…… あっ！ これでええやん！

「なあ、スリイナ」

「ん、何？」

「前々から気になってたんだけどさ……」

俺は新たな話題として、いままでずーっと気になっていたことをスリイナに尋ねてみることにした。俺は何年ぐらいこのことを気にしていたらうか？ ……んー、かれこれ一〇年近くは気にしていたかもしれないな。

で、その質問っていうのは、

「……なんでお前、歩きで通ってんの？」

というものだ。これは当然の疑問って奴だ。だってそうだろ？

スリイナはいいとこのお嬢さんなんだ。ごく当たり前のように執事さんやらメイドさんやらがいるようなお屋敷に住んでいる、いいとこのお嬢さんなんだ。娘のためだけの送迎車なんてものがあつたとしてもまったくおかしくはないはずだ。スリイナの家には車がない、ってわけでもないんだ。むしろ逆で、スリイナの家のカレーには、ディーラーか！ と叫んで突っ込みを入れなくなるほど数多くの高級車がある。

それなのに、スリイナは車で通学しない。

俺はその理由を、前々から聞きたかった。

てなわけで、俺はスリイナの方に耳を傾けた。

「だ、だってそれは……車に送り迎え頼んじゃったら……」

俺の問いに答えるスリイナは、どこか言いにくそうにモジモジとしている。顔もほのかに赤くなっている気がする。……なんだ？ 恥ずかしい理由なのか？

「頼んじやったら、どうなるっていうんだ？」

気になった俺は、促しをかけてみる。

けど、スリイナはうつむくだけで、その続きを言わなかった。

隣でリールも話を聞いていたと思うので、俺はリールの方に顔を向けて「何でだと思っ？」と聞いてみたのだが、「なんとなく分かるけど教えな〜い！」といたずらっ子のような表情で言われてしまった。その表情が可愛かったのは言うまでもない。

ところで、送り迎えを頼んじやったら、それが一体なんだというのだろうか？ そういふ言い方をするってことは、こうして毎朝歩いていくことに何かしらのメリットがあるということなのか？ でも、そのメリットをスリイナは恥ずかしくて言えない。

……恥ずかしいメリット？ 歩くことで得られるメリットで恥ずかしいもの？ それは一体なんだ？ ……んー、全然分からん。

まずは、歩くことで得られるメリットだけを考えてみるか。それ

でそこから恥ずかしいメリットを抜き出してみれば、それがビンゴの可能性だつてある。

でもそれじゃあ、歩くことで得られるメリットってなんだ？ すがすがしさ？ 健康？ 体力作り？ って あ！ 分かった！ あるじゃん！ 歩いて得られるメリットで、だけど人に知られるのは少しだけ恥ずかしいこと。あれだよ、あれ。もうお分かりだろ？ え？ お分かりじゃない？ なーに、簡単なことさ！ それは「ダイエット！ そうかそうか！ スリイナはダイエットのために歩いてたんだな！」

俺は上から目線にものを言い、勝手にダイエットだと決めつけた。てか、それしかないだろ！ 人に言うのが恥ずかしいメリットって！

「ち、違うよ……私は……」

「何っ！ 違うのかよ！ じゃあ一体なんだってんだ！」

「あ、それはね……その……」

スリイナは以前モジモジ状態。

「なんださつきから……もしかしてトイレか？」

もしそうだとしたら、そのモジモジを恥ずかしさとして捉えた俺の推理は根底からくつがえされることになるな。

「ち、違うよ！」

どうやら違うらしい。じゃあ俺の推理は正しいはずだ。何か恥ずかしいことがあるからこそ、スリイナはモジモジしているというわけだ。しかしながら、最有力候補のダイエット選手が即刻退場してしまったからなあ……これは迷宮入りかねえ。スリイナはホントのことを話してくれそうにないしな。

それにかく言う俺も、これ以上追求する気がなくなってきたし、もう、この話はいいか。

「……まあ、違うくてもなんでもいいけどさ、スリイナにはダイエットなんかこれっぽっちだっていらなからな？ 俺はそのままでもいいと思うからさ」

もしかしたら本当にダイエットのためなのかもしれないので、一

応フオローを入れてみた。けど、いま言ったことは本心だ。スリーナはいまのままでも十分に可愛い子だからな。

そもそも女子はみんなダイエット言っているが、俺はモデル体型が嫌いだ。普通でいいよ、普通で。なあ？ みんなもそう思わない？

「このままで……いい？」

スリーナが、俺の言葉を確認するかのように尋ね返してきた。

それに対して、俺は一つ頷いてから返答する。

「ああ、そうともさ。スリーナはスリーナのままでもいい。何も変わらないでいいんだ……」

俺は殺人鬼になってしまった。前とは比べ物にならないほどに変わってしまった。それはもう、普通には決して戻れないほど酷く変わってしまった。

だから、周りには何も変わらないで欲しい。俺を受け入れてくれるところだけは、何も変わらないで欲しい。

あくまで俺の、殺人鬼の願望だが、そんなクズの願いでも叶うというのならば、周りだけは何も変えなくてもいい。

そう考えると、さっきスリーナにした『……なんでお前、歩きで通ってんの？』っていう質問は……いらぬ質問だったのかもしれないな。

だってさ、俺は何も変わらないで欲しいんだ。それはつまり、一緒に登校するこの風景だって変わらないで欲しいってことなんだからな。

「……ま、撤回すればいいんだよな、うん、さっきの質問は撤回するに限る。」

「あの、それでさスリーナ。さっきの質問だけど、あれはなかったことにしてくれ。俺はこのままがいいんだ。スリーナの一緒のこのままがな。だからさ……あの、これからも一緒に……こうやって登校してくれ」

言いながら、俺はもの凄く恥ずかしい台詞だと気づいた。くそつ、絶対赤くなってるぞこれ……。ああもう、ホントに恨むぞ！ 数分前の俺め！

俺はスリイナから顔を逸らそうとしたが、自分から頼みごとをしておいて顔を逸らすっていうのは凄く失礼なことだろうなと考え、なんとか逸らさず現状維持を続けている。

そんな恥ずかしそうな俺を見たスリイナは、何やら嬉しそうに微笑んだ。

「うん、いいよ。私だってこのままがいいから……」

そう返答してくれたスリイナの顔は、心なしかまた赤くなっている気がする。

……きつと俺の恥ずかしい台詞のせいだ。こういうのって言われた方も恥ずかしいんだろうし……。あとさ、スリイナの台詞もちょっと恥ずかしい感じだったもんな。スリイナはいましたがたの俺みたいな感情を味わっているのかもしれない。

でも俺はさ、そう言われて正直嬉しかった。……けど、その言葉は殺人を犯してた俺にじゃなくて、幼なじみとしての俺に言ってるんだろうけどな。

したがって本来は、俺にその言葉を受け取る資格なんてないのかもしれない。

だけど、俺はこの場では……何気ない日常っていう一番大事な時だけは　ずっと前の自分で居るって決めている。殺人なんていう非人間的な行いをしていない時の自分で居続けるって決めてるんだ。だから……凄い身勝手かもしれないけど、俺はスリイナの言葉を受け取る権利を行使させてもらう。

そして、俺なんかにはもつたない言葉を受け取ったのだから、俺はスリイナに言わなければならぬ台詞がある。

「ありがとな……」

「ううん。どういたしまして……」

うおお……照れくさい……。俺は今度こそ我慢できず、スリイ

ナから顔を逸らした。

そうして、明るくもそこはかたなく暗い雰囲気となってしまうたところで、

「ふんっ！」

リールが、面白くない！ といった感じの効果音を上げた。

おっと、そういえばリールが仲間外れになっていたじゃないか。

これはいけない。

俺は急いでリールの方を向いて、

「リール。リールもずっとこのままでいてくれるか？ 特にリールは俺にとつてたった一人の家族だからな。もしリールがいなくなったら……その時は兄ちゃん、泣くからな？」

リールの顔を見据えながら俺が真剣に告げると、リールは不機嫌だった表情を一変させて満面の笑みを浮かべた。か、可愛い……。

「フィー兄ちゃんホント！ 私がいなくなったらフィー兄ちゃん泣いちゃうの？ そんなに私のこと大事？」

何を言ってるんだこの子は！ そんなことは……そんなことはあ

「当然だろ！ 当然過ぎるぞ！ 当たり前前のようにとても大事だ！ だからリール、俺の前からいなくならないでくれるか？」

「うん！」

リールはニイと嬉しそうに笑ってくれた。……これは、俺が必要とされている証として受け取ってもいいのだろうか？ どうなんだろう……？ さすがにそう受け取るのは調子に乗り過ぎってもんじやなかるうか。

まあ、でもいいさ。リールが俺を必要だと思っていようが思っとなかるうが、そんなことはあまり関係ない。なぜなら、俺のすべきことは何も変わらないからだ。

リールに何不自由ない生活を。

これが俺の生きる理由だから。

二章

いつもとはだいぶ違った雰囲気での登校となってしまうたが、何はともあれ、無事に学校へ到着した。

当たり前だが校舎が違うので、ここでリールとはお別れだ。

「いいか、リール。お前をイジメてくる奴とかがいたら、すぐ俺に言えよ。そいつをこらしめてやるからな。兄ちゃんはいつだってお前の味方だ」

幸い、いまのところリールにそんな兆候は見られない。けど、もしもリールがイジメなんてものに巻き込まれたら……俺は、そのいじめっ子をこらしめるどころじゃ済まさないことだろう。

といった具合に結構物騒なことを考えていると、リールはまぶしい限りの可愛らしい笑顔を振りまいてきた。

「大丈夫だよ！ もう、ファイ兄ちゃん心配性なんだから。イジメなんてものと私は無縁だよ、無縁！ それどころか、私モテモテだもん！」

言い終わると、リールは踊るように校舎へと走っていた。

「も、モテモテだとお……？」

そ、それはそれで許すまじだなあオイ！ ボウズどもめえ！ リールに変なことしたら俺が八つ裂きにしてやるからなあ！ ……いや……でもまあ、あれか？

「イジメられるよりは……マシ、なのか？」

俺がそう呟いた時には、もうリールの姿は初等部の生徒たちの中に紛れ込んでしまっていて、完全に見えなくなっていた。

俺はそのことに若干の寂しさを覚えた。なんかさ、リールがどこかに行ってしまったみたいだよ……。

しっかしモテモテかあ……初耳だよお……。

俺は今世紀最大のため息と言ってもいいくらいのため息をついた。「やっぱりお兄ちゃんとしてはつらいの？」

そのため息を見てか、スリイナが様子を窺うように尋ねてきた。俺はもう一度盛大にため息をついたのち、うめくように言葉を返す。

「……そりゃそうに決まってるだろうが。もうつらいなんてもんじゃないな……。だってあれだぞ？ スリイナに好きな奴がいるかどうか知らないけどさ、もしいるなら、そいつがハーレム状態ってことだぞ？ つらいよりもつらくないか？」

そう告げてみると、スリイナは悲しそうに顔をしかめる。

「……フィーがハーレム状態か……確かに嫌だね、そんなの……」
ん？

「な、なんで俺がハーレムなんだ？ 俺は、お前の好きな奴がって言ったんだぞ？」

「あ、その、えと、そ、そうだね。フィーじゃないね。ご、ごめん……」

スリイナは慌てたように前言撤回すると、顔を赤く染めてうつむいた。

……つたく、恥ずかしい間違い方すんなよな。にしてもびっくりしたあ……。スリイナが俺のこと好きなのかと思ったじゃんか……。

ああ、なんかもう！ 俺も照れくさくなってきたぞ！

「さ、先行くからなっ！」

俺は足早にスリイナから離れる。振り返りもせず校舎にまっしぐら！

早くあいつとバカトークをして、この照れくささをなくさなければ！

一人の男を頭に思い浮かべながら、競歩のように歩くこと一分。

俺は教室に到着した。自分の席へと向かい、机の横についているフックにカバンを下げた。

えーと、それであいつは……何っ！ まだ来てないだと！

俺の探し人はまだ来ていないらしい。くそっ……。なんでこういう時に限ってこないんだよ。来なくてもいいタイミングとかでは出て

くるくせに……。

ああこれじゃあスリイナが先に来ちゃっうじゃんかあ　なんて思
つてるとほら、来ちゃったよ……。

走って俺を追いかけてきたらしく、スリイナは少し息をあげてい
た。ホントは席に着いて休みたいだろうに俺のところへ直進してき
て、

「フィー、ごめんね。変なこと言っちゃって……」

だとさ。そう言われた俺は一体どうすりゃいいんだ？　別に俺、
怒ってないのに。ただ単に照れくさくて逃げただけなのに。でも、
そうやって説明すんのもまた恥ずかしいし。ああ、ホントにどうす
りゃいいんだ……。

と考えてるあいだ、現実から見れば俺は沈黙しているわけだ。

そしてスリイナは、どうやらその沈黙を無視だと受け取ったらし
い。

「あの、ほ、ホントにごめんね……」

震えた声音で言い残して、スリイナは廊下へ走り去っていった。

ドラマみたいだ……って客観的に見てる場合じゃないよな、これ。
やっぱこれって追いかけるべきなのか？　……べきだよな。

追いかけてようと決意して俺は立ち上がる。足を廊下に向けて、教
室の出口から駆け出そうとしたその時

「おいフィーニツト！　スリイナさんが泣いてたぞ？　お前何しや
がった！」

ああもう！　なんちゅうタイミングなんだ！　俺の言ってたこと
が分かったか？　こいつは　マイケルはこういう奴なんだ。

もう知らん！　こんな奴の身体描写はしてやらん！　……でも、
ちよつとだけかわいそうだから、一つ特徴を言っつてやることにする。
えーと、こいつの特徴は……あー、特徴は……その、うん、エロ
い。

身体描写じゃないじゃんって突っ込みは受けつけないぜ。マイケ
ルは君たちの心でそれぞれの形に創造してくれ　ってこんなこと

もういいやいいや！　なんで廊下に行こうとしたのか？　そんな理由は考えても出てこないな、うん。

それにあれだ、時計だってもうすぐHRって時間を指してるしな。これから教室の外に行ったって何もできやしない。だからスリイナも帰ってくるだろ　ってそう！　スリイナ！　スリイナじゃないか！　俺はスリイナを追いかけようとしてたんじゃないか！　いやあ、モヤモヤが一気にスーっとなくなったぜ！

お、噂をすればなんとやらだ。スリイナが帰ってきた。まあ、時間には厳しい奴だからな。……さてと、謝罪と弁解をしに行くか。

あいつが廊下に飛び出していったのは、俺の沈黙のせいだったもんな。

俺はスリイナの席へ向かう。

机の真横に俺が立つと、スリイナはハツとした表情を浮かべながら俺の存在に気づいた。けど、顔をすぐに別方向へ逸らした。

……顔を逸らした行為には、どんな意味が込められていたんだろう……？

涙を流した目を見られたくなかったのか。それとも怒ってるのか。

いや、どちらだろうと関係ないな。だって　俺が泣かせたことに変わりはないんだからさ。

「……スリイナ、その、ごめん」

俺が謝罪を述べると、スリイナは驚いたようにこちらを向いた。

スリイナの穏やかな瞳は若干ながら赤みがかっていて、まだうつすらと涙が残っていた。

顔を逸らした理由はどうやら前者　泣き顔を見られたくない、の方だったようだ。

「……謝らないで。私がフィーに変なこと言っちゃったのが悪いんだから」

またスリイナは謝ってくる。いっつもだ。どっちが悪いとかあんまり考えずに、スリイナはいっつも勝手にとにかく謝ってくる。それが悪いとは言わないけど、たまには謝らせろ！

「何言ってるんだよ。今のは誰がどう見ても俺が悪い。ちょっと考えごとしてたとはいえ、俺はスリイナの言葉を無視したんだ。そのことに変わりはない。だから俺が悪い。ホントにごめんな」

「だ、だからフィーは謝らなくていいんだってば。私はもう気にしてないからあ」

俺が頭を下げると、スリイナは焦ったように言葉を発してきた。

どうやらホントに怒ってないらしい。なら、お言葉に甘えて謝罪はここまでにしとくか。

俺が頭を上げると、スリイナは安堵したかのように胸へ手を押し当てていた。

「そこまでのことかよ……」

「そこまでのことだよ。悪くない人に謝られても困るだけだもん」
「だから悪いのは俺だっ……」

そこまで言いかけて、俺は折れることにした。このままだと水かけ論になりそうだからな。

「この話はここまで。埒が明かないったらありやしない。もう悪いのはどっちもってことでいいか？」

「まあ……それならいいよ。でも、ホントは全部私が悪いんだからね？」

「へいへい……もう勝手にそう思ってくればいいさ」

俺が呆れて呟くと、スリイナは「やったー」ともうわけの分からない反応を示していた。

けど、俺も俺で満足している。スリイナの笑顔を 癒しをくれる優しい微笑みを見ることができたんだからな。スリイナもリールと同じで、にこやかな方が似合ってるし……その方が可愛い。ま、口が裂けても言えないことだけだ。

「じゃ、俺は席に戻るから」

「うん」

そう告げて、俺は自分の席に戻る。その途中、マイケルが下卑た笑みを浮かべながら話しかけてくる。

「どうだった？ 怒ってたか？ フィーなんて死んじゃえって言われたか？」

「言われてない。マイケル、お前の目は節穴か？ 見るよスリイナの顔を。あの顔で死んじゃえ、とか言うわけないだろ？」

ここからだと横顔しか見えないが、スリイナは確実に機嫌よさげだ。もの凄くニコニコしている。

「そうかそうか。それは変なことを言いちまったな。……いや、ただな、あの顔でフィーなんて死んじゃえって言おうプレイでもしてたんじゃないかと思ってよお」

「どんなプレイだ！ あんなニコニコした顔で死んじゃえって言おう奴があるか！ もしそうだとしたら、スリイナ生粋のサディスト過ぎるだろうっ！」

あははっ！ フィーなんか死んじゃえ！

と言うスリイナを想像してみた。

……怖っ！

「でもよお……あの顔でSだったら、それはそれでアリだよなあ……」

えへへへへ、と笑い始めるマイケル。……気色悪い奴。

一刻も早く関わりを絶とうと考えて、俺はマイケルの席から秒速一メートルの速度で離れていく。

そうして俺が自分の席に着いたところで、担任の先生がやってきた。

あーあ、また退屈な時間が始まるのか……。

「死ぬうつつ……」

唸らせてくれ。今日の午前の授業は内容が濃すぎたんだ。どのくらい濃かったかと言うと、薄めないカルピスの原液ぐらい。これで理解してもらえると嬉しい限りだ。

「うう……あああ」

俺は机に突っ伏して唸り続ける。

と、そんな俺の隣に突如ふわっとした雰囲気を持つ何者かがやってきた。俺の知り合いにこんなオーラを発する者は一人しかいない。

「フィー、お弁当食べよ？」

もう例のごとくスリイナである。俺は机とコンニチハしながら、
「今日はなんですかあ？」

弁当の中身を聞く。俺の（リールのも）昼飯はスリイナが作ってくれているからな。

「今日はね、サンドイッチだよ」

……サンドイッチ選手、中四日のローテで回ってるなあ。サンドイッチはスリイナのレパートリーの中でエース格のようだ。

あ、これは別にサンドイッチに飽きたとかじゃないぞ？ 美味しいからいいんだ。

「どれどれ、サンドイッチの献上を許可する」

「え〜っ！ ここで食べるの！ ……屋上に行かない？」

来た来た………天気がいいとすぐどっか別のところで食いたがる。

「別にここでいいだろ？ 机があるんだからさあ」

「そうそう。机があった方がスリイナさんを食いやすいよな。それに最高の羞恥プレイだ！ なあ、フィーニット」

唐突に現れた変態の言葉。

「……マイケル、お前なあ……」

乱入してきた上に、その乱入方法がお下劣トークと来たもんだ。俺は心底呆れる。

未だ机とコンニチハしたままの俺には見えないけど、きっとスリイナは顔を真っ赤にしていることだろう。お嬢様だから知らないけど、スリイナはその手の話にまったく免疫がないんだよ。

「おいマイケル、お昼以降はお前と関わりたくないって、なんと言ったら分かるんだ？」

マイケルは昼から徐々にギアが切り替わっていくんだ。夜は大人

もドン引きするほどの話をするともつぱらの噂だ。

「そんなひどいこと言うなよ。俺たち友達だろ？」

「朝だけな」

「あ、朝、だけ……？」

「ああそうとも。朝だけだ」

ホントなら朝だつてつき合いたくない、というのはさすがにかわいそうなので言わないでおく。

それよりも、いまはこのエロ魔人から早いとこ離れたいので、俺は机とサヨナラすることを決意。スリイナの言うとおりにしようと思つ。

「よしスリイナ。屋上に行こう」

やっぱり顔を紅潮させていたスリイナの手を取り、俺は屋上へ向かう。

「お、屋上で食うつもりだな！」

「当たり前だろ！ お前のいるところでメシなんか食えるかつ！」

俺たちは手をつないだまま走り、そうして屋上にやってきた。おお、風が気持ちいい。

授業という呪術によってかけられた呪いが、新鮮な空気によって浄化されていくような感じた。日光が少々まぶしいが、それもまた心地よい。

まあ確かに、弁当を食うにはちょうどいいかもしれないな。

何より、誰もいないというのがいい。きょうび、屋上でランチ、なんて奴らはいないのさ。普通に教室とか食堂で食ってるよ。

「あ、あ、あの……フィー？」

依然として赤い顔したスリイナが、恥ずかしそうにおどおどした口調で、俺に声をかけてきた。

……ああ。

俺はその問いかけだけで、スリイナが何を言いたかったのかをなんとなく察することができた。

「悪い悪い、手、握りっぱなしだったな」

俺はスリイナの手を放す。いくら幼なじみでも、やっぱり手を握るなんてことされたら恥ずかしいよな。いまそうやって意識したら、俺もちょっと恥ずかしくなってきたもん。

なんて考えていたのもつかの間。

どうやら手を握っていたことはあまり関係なかったらしく、スリイナはまだおどおどとしている。

「なあ、どうしたんだ？」

具合でも悪くなったのかと思いい心配して尋ねると、スリイナは真っ赤な顔をよりいっそう赤くさせて、

「た、食べるの？」

そう聞いてきた。え？なんでそんな質問で顔を赤くする必要があるんだ？ 昼飯食べるに決まってるじゃん。エロ野郎の前で昼飯なんか食えないからここまで来たってのに。

「スリイナ、食べるに決まってるんだろ。さあ、早くしろ。ここまで来ておいてお預けはナシだぞ」

早く昼飯を渡せ。その手に持っているものを渡すんだ。

「ほ、ほんとに食べるの？」

なんだ？ 失敗でもしたのか？ でもさっきは自信満々にサンドイッチだつて言ってたよなあ。そもそもサンドイッチを失敗ってなんだよ。どこそこの二次元のヒロインかって話だ。

「しつこいぞ。食うったら食う。だから早くしろ。お前から差し出さないって言うのなら、俺は力づくで奪うぞ」

サンドイッチをな！

「わ、分かったから、力づくはやめてね……」

どうやらやっと分かってくれたようだ。スリイナは右手に持ったサンドイッチの入った弁当箱を地面に置いた。

やっと昼飯だ。俺は地面に座る。しかし、なぜかスリイナが座らない。

「ん？ どうした　って何してんだああああっ！」

スリイナはなぜか制服を脱ぎ始めていた。まだ九月上旬で制服が

まーす」と常套句を発したのち、俺はハムレタスにかぶりつく。

あ、やっぱ美味しいな……。

しみじみとそう思う中で、俺はある別のことも考えていた。

なぜスリイナは俺の前で服を脱いだのかってことだ。さっき俺は勘違いってことで納得したけど、やっぱおかしいよな。

だってスリイナは、その……お、俺に食われてもいいと思ったらしいんだぞ？ ど、どういうことなんだ？ 朝、リールと別れた直後のスリイナの反応だと……スリイナは俺のことを好きじゃないはずなんだ。

なのに……なんで好きでもない奴の目の前で服を脱いだ？

しばらく思考を働かせていると、俺の中に、ある一つの単語が浮かび上がってきた。しかもそれは、いまさっきのスリイナを表現するのに最適な言葉だった。 てゆーかこれだ！ これしかないよ！

あまりにもジャストフィットするその言葉。心地いい感覚に襲われて心中で連呼しまくっていると 俺は思わず口を滑らせて、その単語を現実世界に音として繰り出してしまった。

「痴女！」

「ひゃう！」

可愛い擬音を発してスリイナが反応した。それからみるみる落ち込んでいくのが分かる。まるでアサガオが枯れていくさまを早回しで見ているようだ。 ってそんなこと言ってる場合じゃないぞ。

ふお、フォローしないと……。

「お、オープンなのは……悪いことじゃないと思うぞ？ 俺は」

「ひゃう……」

どうやらフォローを間違ったらしい。

スリイナは完全に枯れ果ててしまった。

我らは若者。

枯れ果てようが朽ち果てようが、時間さえ経てば全てを忘れることができる。学生はやることが多いのだ。

そして、それはスリイナも例外ではなかったようだ。放課後のいま現在、スリイナは昼のことなどすっかり忘れていたようだった。

立ち直ってくれて何よりだ。

帰り支度をしながらスリイナを見ていて、俺はそう思った。

さて、話は変わるんだが、放課後というのは一日の中で一番ハッピーなことが起こる時間帯なのだが、それを皆さんはご存知だろうか？ ご存知ない場合、それは人生の九割を無駄にしていること請け合いだ。

そのイベントが起こるのはもう少し先。それまで俺は、初めて球場でメジャーの試合を見た少年のようなわくわく感を抱いていようと思う。

帰り支度の済んだ俺は、スリイナのところへ向かう。

「さ、帰ろうぜ！」

「フイー、嬉しそうだね」

スリイナは少しバカにしたような笑みを浮かべて俺を見てくる。でもいいんだ。だって実際、スリイナの言うとおり俺は嬉しいんだからな。隠す必要なんてない。やっと拷問から開放されるような気分と言えれば分かるだろうか。ま、拷問とか受けたことないんだけどな。いや、受けた受けてないなんてこの際関係ない。いまの例え方は間違っていないだろうからな。これほど俺の気持ちを反映した言葉もないと思う。いや、もう現実が拷問そのものだといっても過言ではない。

俺とスリイナは校舎を出る。そうして、学校の校門付近で立ち止まる。

ここまで来ればもう言わなくなっちゃって分かるだろ？

一日で一番楽しいイベント。

拷問からの開放。

それらが意味することは、一人の少女との再会だ。

待つこと五分。俺にとってこの五分は、今日過ごした時間よりも長く感じられた。

「ああ、可愛い……」

俺は思わず呟く。でも本当なんだから仕方がない。

初等部の校舎から出てくるどの子よりも可愛い。ああ、輝いている。あんな子が妹でホントによかった　と、ここまで言えばどんな奴でも、例えサルでも分かるだろう。

そう、俺が待っていたのはもちろん　リールだ。

と、リールが俺の存在に気づいたらしくブンブンと手を振ってくる。ああ、幸せだ。たったこれだけで今日の疲労が全て吹っ飛ぶ。

リールがこちらに近づいてくるにつれて、俺の口元は緩んでいく。

「フィー兄ちゃん！」

俺の下に駆け寄ってきたリール。そんなリールに、俺はちょっと早いかもしれないが、この言葉をかけた。

「リール、おかえり」

「ただいまっ！」

口をニイと横に開き、白い歯を見せてくる。

返事を返してもらっただけで俺は……俺は感動した！　これを言ってもらったためだけに学校に通つてると言ってもいい！

俺は身を悶えさせる。周りから「あ、またあの人だ……」みたいな視線で捉えられている気がするけど、そんなの知ったことかつ！　可愛いものを見て悶えることの何が悪いってん………リールも引いていらっしやる？

ふと目に入ったリールの顔は、引きつった笑みを携えていた。

……言うまでもなく、俺は悶えることをやめた。気を引き締めるために咳払いを一つ。

「うおっほんっ。さ、帰ろっぜ……」

俺は勇気を振り絞ってリールに手を差し出してみた。

すると、リールは嫌がる素振りを一つも見せずに俺の手を握り返してくれた。……おお、なんて優しいんだろう……っ！

リールの手は小さいが、生きていると感じさせる力強さがあり、しかしながら繊細さも兼ね備えている温かな手だ。

その温もりを感じ取りながら、俺は歩き出す。

「スリイナ姉ちゃんのサンドイッチ美味しかったよ！」

登校の時とまるつきり同じ道を通りながら帰る道中。リールの明るい声が話題を生み出した。

「ホントホント。いくらサンドイッチは作るのが簡単だっていってもさ、あの味を出せるスリイナの腕は本物だよな」

俺はリールの意見に乗っかる。

それを聞いたスリイナは嬉しそうな、けど自分を嘲るような笑みを浮かべながら、

「そう言ってもらえるのは嬉しいけど……でも、美味しいのはいい食材を使ってるからだと思うよ。同じ材料で作れば、フィーにもリールちゃんにだって作れると思うなあ」

「いや、それは絶対に違うぞスリイナ」

「そうだよ。違うんだよスリイナ姉ちゃん」

兄妹揃っての反論に、スリイナは首を傾げていた。……まあ、兄妹揃ってと言っても、たぶんリールは俺の言葉をマネしただけなんだろうけどな。

なので、当然俺が続きを連ねていく。

「スリイナ、よく考えてみる。一流の料理人だって食材は一流のものを使うだろ？ それと同じだ。いい食材使って美味しいもんが作れるんなら、それはスリイナの腕がいいってことだろ」

「んー、そうなのかな？」

スリイナはどこか否定的に視線をさまよわせていた。

素直に喜べばいいんだよ、ったく。……もう一押ししてところだな。

「そうなんだよ。そもそも、いい食材を使ったら必ず料理が美味くなる、なんて保障はどこにもないだろ？ 下手な奴は高級食材だろうとダメにするだろうしな。だから、スリイナは料理が上手だって

「ことなんだよ」

俺がそう告げると、スリイナは気恥ずかしそうに笑った。

「そうだね。フィーがそう言うのなら、そうなんだろうね。でも私、それで満足はしない。もつともつと食材を上手に扱えるようになる。なんて言うのかな……食材の味を引き出すみたい……ね？」

「おう、頑張ってくれ。お前なら引き出せるさ」

腕を上げてもらえるのは悪いことではないからな。

しかしまあ、このあとも出てくる話題は食い物ばかり。この年代なら恋愛の話なんかがあってもいいような気がするんだけどな。

まさに色気より食い気ってか。

ま、いいんだけどな。この二人の恋愛話とか聞きたくないし。特にリールのは絶対に聞きたくないぞ！……っと、つい熱くなってしまうた。

でも、妹の恋愛に口を出したくなるのはどこの兄貴もそうだろう？

……あまり賛同を得られそうにないな。だが、それは俺も分かった上での所業だ。自分が気持ち悪いつてことぐらいは分かっている。

けど、分かっているても、それでも守りたくなるんだ。リールにはそれほどの……。

俺はスリイナと食い物の話をしているリールを一瞥する。

……それほどの魅力があるんだからな。

はは……これがキモいつてことなんだろうな。

なんて考えていると早いもので、もう我が家に到着した。

「じゃあスリイナ、また明日な」

「バイバイ！ スリイナ姉ちゃん！」

「うん。また明日ね」

スリイナは楚々と手を振り、俺たちの前から離れていく。

もう毎度のことなので、見えなくなるまで手を振り続けるなんてことはしない。ある程度離れたところでお互い切り上げる。

スリイナがこちらに背を向けたところで、俺たちは家に入った。

「ただいま」

「ただいまっ」

俺とリールは同時に声を発した。中から父さんや母さんの返事が返ってくるわけじゃないけど、挨拶はきちんとしなさいという家訓の下に育ってきたから、まあ、癖みたいなものかな。

俺とリールはそれぞれ自分の部屋へ向かう。家に帰って最初にすることは着替えだ。脱いだ制服はきちんとハンガーにかけてしわにならないようにする。……こうしないと母さん、うるさかったなあ……。

普通に生活していると、そんな風に父さんや母さんの言動を思い出すことがある。親ってというのは、それだけ子供の生活に欠かすことのできない存在ってことなんだろうな。別にいなくなっただけから分かったってわけじゃないけど、いなくなられてしまっただけに沁みたっていうのかな……親の影響は大きいんだなって改めて認識した感じだ。

そして再認識した感想だけど、やっぱり親は居た方がいい。俺たち子供の面倒を見てくれるありがたい存在だし、それに何より、俺にしてみれば……父さんと母さんさえ生きていてくれれば……殺しなんかには手を出さなくてもよかったっていうのにな。

けど、ここで父さんと母さんにそういう思いを抱くのはお門違いも甚だしい。殺しはあくまでも俺自身が決めた道だ。むしろ父さんと母さんは、俺がそんなことをしようとしてしていると知ったら、間違いないく止めてくれるだろう。無論、それは生きていればの話で、現実にはそうじゃない。生きていないからこそ、俺は裏の世界に堕ちたわけだ。絶望がうごめく世界にな。でも、俺の世界は裏だけじゃない。輝かしい表もある。

表には父さんと母さんの残した形見がたくさんあって、その中でも一番大きな形見は、自宅兼何でも屋である我が家だ。近所の人たちの役に立ちたいという志の下に始めた『ストルス雑務店』。

俺はその志を　父さんと母さんの思いを受け継いで、今日も『ストルス雑務店』を開業しようと思う。ホントは受け継ぐ資格なん

てないんだらうけど……。

というより、正直な話、無理に受け継ぐ必要はないんだ。だって、殺しの報酬だけでも普通に生きていくことはできるからな。

……するとここで疑問が湧いてくるよな？

なんで俺は『ストルス雑務店』を受け継いでるのか。

なんでか分かるか？ 結構ちゃんとした理由があるんだぞ。

はい、シンキングタイム終了ーっ！ っつてシンキングタイム
なかったじゃん！ まあ別にいいよな？ 答えを教えてやるんだからさ。

で、その答えてっていうのは、要するに隠れみのだ。

殺し屋で十分に儲かってるけど、かといって何もしないと怪しまれるかもしれないだろ？ 俺が殺し屋をしていることは当たり前だけれど誰も知らない。けど、父さんと母さんがいないことは知られてる。それゆえに、『ストルスさんとの坊主は何もしないでどうやって生活費をまかなってるんだ？』ってご近所さんに怪しまれるかもしれないだろ？

だからこそ、俺は『ストルス雑務店』を営業するんだ。もちろん父さんと母さんに対する思いがないわけじゃないぞ？ さっきも言ったけど、志はきちんとして受け継いでいるつもりだ。半端な仕事はしちゃいない。

それを証拠にっていうか、最近のご近所さんからの依頼がだいぶ増えてきているんだ。俺の健気さがご近所さんに伝わってきたんだらうな。

でもあれだ、だからって殺しはやめない。依頼が増えてきたといつても、まだそこまで稼げてるわけじゃないからな。せいぜい、ジヤパニーズお父さんの毎月の小遣いぐらいだ。

「さーて、今日も頑張りますか……」

動きやすいようジャージに着替えた俺は、一階の仕事場へ向かう。

仕事場には色々な道具が置いてあって、まるでホームセンターの一角のような場所だ。

「どれどれ、今日の依頼は………って今日はナシかよ」

留守中の依頼を承るために用意している、くじ引きに使うようなボックスを覗いて、俺は呟いた。……ま、こんな日もあるさね。

俺は売店風のカウンターに肘をつきながら、ぼけーっと依頼を待つことにした。

しかし、我が家の前を通る人々は、全員がただの通行人でしかない。

ああ、退屈だ……なんて思っていると

「フィー兄ちゃん！」

まるで計ったかのようなタイミングでリールがやってきた。す、素晴らしい！ さすがリール、ナイスだ！

「フィー兄ちゃん、今日は依頼ないの？」

「そうなんだよ。だからとてつもなく暇だ。リール、なんかないか？」

「なんかって何？ 遊び？」

「そう、遊びだ。……ここから離れるわけにはいかないから、ここのできる簡単な暇つぶしみたいな奴とか、かな」

そう言う俺は実のところ、リールがいればそれでいい。見てろっというなら何時間でも見ていられる。見るだけでも十分に暇が潰せるってもんだ。

けど、それじゃアリアルがかわいそうだ。ただ黙って見られてるだけなんて、天真爛漫のリールにはできないし、そもそもそんなのはリールじゃない。

「うーんとねえ……じゃあ、ハンプティ・ダンプティの早書き競争なんてどうかな？」

「何それ！ 初等部で流行ってんのか！」

「そうだよ！ 私一番なんだよ！」

ほほう、さすがだ。そんなマニアックそうなゲームで一位を取れ

るとは……。

いや、でも待てよ……？

「それって絵のクオリティはどうなんだ？ 丸に手足つけただけ、みたいなのか？」

もしそうなら、運次第で誰でも一位なれそうだけど……。

「ううん。私はほんのちよつとだけ凝ってるよ。先生、私の絵を見て褒めてくれたもん。『うわ……っ！』って！」

引いてる？ 引いてるよな？ 先生明らかに引いてるよなっ！
ってことはリール…… 早書きなのに凄い次元の絵を描いてるって
こと？

……見たい。

「よし！ それでいいぜ！ 兄ちゃんと勝負だ！」

「負けないよっ！」

というわけで、第一回・ハンプティ・ダンプティ早書き王座決定戦が始まった。

カウンターに置いてあった紙とペンをリールに渡す。俺も同じものを用意し、さあ始めましょうとしたところで

「じゃあ公式ルールの説明ね」

だとさ。俺は鼓膜が正常に機能してないんじゃないかと、我が耳を疑ったね。

だって、公式ルールって何？ 早く書くだけの遊びになんのルールがいるっていうんだ？ そもそも公式って……どこが認可したんだ？

さすがに突っ込もうかと思っただが 俺は我慢した。

そりゃそうだろ？ リールが一生懸命に説明をしてくれているんだ。これを邪魔しようなんて思う奴は鬼か悪魔だ。

で、一通りの説明が終わり、俺は聞いたルールを改めて反芻することにする。

まず いや、まずっていつか、これ一つしか公式ルールとやらはなかった。

「ハンプティ？」「ダンプティ！」のかけ合いでスタート。

どうだ？ 凄くシンプルだろ？

ではでは、早速始めたいと思う。ちなみに、最初の「ハンプティ？」は挑発の意が込められているらしく、チャンピオンが言う台詞らしい。なので、自称一番だというリールがそれを言うことになった。

それでは改めまして……

「ハンプティ？」

「ダンプティ！」

戦いの火蓋が切って落とされた。

カカカカカカカカカカ と、ペンの走る音のみが空間を支配する。

俺はまずだ円を書いた。そこに手と足を書き足し、最後に少しリアルな顔を書こうとしたところで

「できたあ！」

リールがカチャリとペンを置いた。

……おいおい、嘘だろ？ リールの描くハンプティさんは、先生が思わず引くほどのできらしい。俺のハンプティさんなんて、どこぞのエセピカソが書いたような酷い状態だぞ？ それを上回るスピードで引くほどの絵なんて書き上げられるはずがな

「うわ……っ！」

ごめん。前言撤回。書けてます。引くほどの絵が書けてます。劇画タッチのハンプティさんが紙の中で躍動しています。

これは……完敗だ。

「……リール、負けたよ……」

「ほんと？ えっへん！ 私、凄いでしょ！」

「ああ、凄いよ。もう凄すぎて神だよ」

そう言うってから、俺はもう一度リールの描いたハンプティさんを

眺める。

……凄すぎる。リール、将来は画家かな？ もし画家になりたいって言ったら、俺は迷わず支援することだろう。

「ああ楽しかった！ ジュースジュース！」

しかし、秘められた才能を爆発させたリール本人は、絵に興味なんてないと言わんばかりに家の中へと戻ってしまった。きっと、俺を負かしたから満足したんだろうな。

とその時

「おい、何でも屋の兄ちゃん！」

数人の子供の声がこだましてきた。ちえ、またあれかよ。いい加減にしろよな、まったく……。

俺はため息をつきながら、声のした方を向く。

すると、予想通りの面子がこちらに向かってきていた。全員がNとYの組み合わせだった野球帽を被っていて、手にはバッドとグローブ。まあ言うまでもなく、近くの空き地で草野球をしているガキ集団だ。

ここのところ、二日に一回くらいのペースでやってきてくれるお得意さんだ。しかし、ここのお得意さんには正直なりたくない。だつてさ、

「ボール取ってきて！」

こればかり。しかも報酬だつて全然なんだぜ……。

「はい、A・ロッドのサイン入りボール」

「はいはい、こんなシヨボいのいらな　つて、えっ！　何で？」

いつもはアメ玉とかのくせに！」

俺は手渡されたサイン入りボールを食い入るように見つめる。

「サインは俺が書いたんだっ！」

「つぎけんなあああああああああああああ　っ！」

俺は思わずそのボールをはるか遠くへ投げてしまった。

それを見たガキどもが目を大きく見開いて、

「……今度、試合でライトやってよ」

などと抜かしてきた。俺は当然断った。……って、あれ？ こいつら、いまのボールで野球すればよかつたんじゃないの？ ……バカ野郎っ、それを指摘するのは無粋ってもんだぜ……。

「それより、ほんとに依頼したいって言うなら、もつとちゃんとした報酬よこせつての。こつちは真面目な仕事でやってんだぞ？ これで食ってるんだからな？ お前らそこんとこ分かってんのか？」

「……分かったよ。兄ちゃんが絶対納得する報酬をあげるよ」
言いながら、リーダー格のガキはポケットから何かを取り出した。どうやら折りたたまれた紙のようだ。それをそのまま俺に渡して行く。

「なんだ？ 土地の権利書でも持ってきたか。それならなんでもしてやるぞ。」

人殺しでもな。

なんて考えながら、俺はその紙を開く。

「うわ……っ！」

土地の権利書じゃなかったです。ハンプティさんでした。さっきリールが書いた奴と同じレベルのハンプティさんでした。 いや、

これはレベルが同じっていうよりも、

「……リールが書いた奴じゃないか？」

尋ねると、ガキどもが頷く。

「なんでそんなもん持ってたんだよ？」

「あれ？ リールちゃんから聞いてない？ ハンプティの早書きが初等部で流行ってるんだぜ？」

「あ、いや、それはさっき聞いたけど……そうじゃなくて、なんでこのハンプティをお前が持ってたんだ？ って意味で俺は聞いたんだよ」

「ああそれはね、今日、リールちゃんからもらったんだ。それで、リールちゃんの兄ちゃんはリールちゃんのが好きだつてリールちゃんが言ってたからこれあげればきつと依頼を……って、に、兄ちゃん……？」

出すにはこうするしかなかったんだ。

ああ、怖かった……。

なんでいつつもあの家にボール入るんだよ。なんだっけ？ 盆栽
って奴を毎回毎回もの見事に砕けさせてるもんなあ。てかさ、あ
の人も盆栽の場所変えるとかさ、色々打つ手はあるじゃんか。学習
しろよな、ったく。

と心で愚痴りながら、俺は家に帰ろうとしているわけだ。という
より、もう家の前だ。でも家にはまだ入らない。

俺は『ストルス雑務店』のカウンターに腰かける。それから、夕
闇が訪れた始めた空を見上げた。

また夜が来る。俺の本業の時間がまた近づいて来たんだ。

そう考えると、少しばかりの悲しさと寂しさが俺を包み込んだ。
けど、こんな感覚にも慣れたもんだ。

さてと、やりますか。この静かな仕事場じゃないと安心してでき
ないことを。

話を誰かに聞かれるわけにはいかないからな。

俺は携帯を取り出して、ボイスチェンジャーを取りつける。

何、仲介屋への電話って奴さ。

話は二、三分ほどで終わった。

ターゲットの再確認くらいだからな。

これで表でやることは終わった。あとは家に入って夕食だ。

夜はスリイナが作りに来てくれないから、夕食作りは必然的に俺
がやることになる。別に面倒だとは思わない。たださ、俺のもの凄
い下手くそな料理をリールに食わせるってのが、ねえ……？

けどさ、リールが料理を作れるってわけでもないからな。

だから結局は、俺が作るしかないわけよ。

携帯からボイスチェンジャーを外したのち、俺は家に入った。

リビングへ向かうと、テーブルに教科書ノートを広げてリールが宿題をしていた。

「あ、フィー兄ちゃんおかえり！」

リールはくりっとした目を細めてそう言った。

俺は嬉しく感じる反面、悲しくも思えてきた。

いつもだ。リールはいつも、父さんも母さんもない家で一人きりで待っていてくれる。

ホントなら俺がそう言っただけでいい。俺がリールを迎えてやりた

い。

「フィー兄ちゃん？　どうかしたの？　ぼーっとしてるよ？」

「あ、いや……なんでも」

まあ結局、俺がリールを迎えてやるなんてことは、夢のまた夢だ。だってそうだろう？　俺がリールを迎えるってことは、端的に言うて俺は二トってことだろう？

それはちよつと好ましくない展開だ。俺の夢は、っていうより生きる理由は、リールに何不自由ない生活をさせ続けること。だから二トじゃいかんだ。

俺はただただひたすらに、馬車馬のように働けばいいんだ。

あ、そう考えると、やつぱりリールにはこの状態で居てもらうのが一番いいのかもしれない。何せ帰ってくるたびに、俺はこうして癒されるわけだからな。それにあれだ、家にいてもらうのが一番安心できるしな。

けれど、リールにしてみればやつぱり退屈なんだろうな。俺が雑務で外に出てる時はずっと一人なわけだし。……さっきのハンプテイさん早書き対決の時とか、もの凄く楽しそうにしてたもんな………よし、笑わせよう！

迎えてやれない代わりというか、とにかくリールを楽しませてやるという衝動に駆られた俺は、

「マンションも……ダイワハウチュ」

この前テレビでやってた世界の面白CM集の中で、特に印象に残

「お、おう！ 分かったぜ！」

俺はマツハに相当すると思われるスピードでキッチンに移動し冷蔵庫を覗く。ハンバーグでいいか。焼くだけだし。

というわけで一〇分後。

我が家の食卓にはハンバーグとつけ合せのコーンとポテト、それに加えてパンとコーンポタージュという、どこまでも普通の雰囲気を持つ料理たちが乗っかっていた。

ちなみに、コーンポタージュは粉末にお湯を注いだだけだ！

…別に威張って言うことじゃないな、ごめん。

俺の対面に座っているリールはこれらを見て、

「美味しそう！」

だってさ。こんな平凡な料理に対しても、リールは目を輝かせてくれる。

俺はホツとしたね。リールにそう言ってもらえれば、これ以上ない喜びだからな。

「よし、じゃあ食うか」

「うん！」

「いただきます」

「いただきます！」

俺はまず、メインであるハンバーグに手をつける。どうやらリールもハンバーグのようだ。俺たち兄妹はほぼ同じタイミングで、口にハンバーグを放り込んだ。

……んー、まあまあだな。もうちょっと焼いてよかったかもしれない。

そう思いながら、俺はリールの顔を窺う。俺の味覚なんかよりもリールに合ったかどうかが重要なんだ。

「まあまあだね。やっぱりスリイナ姉ちゃんの方が美味しいよ」

「さ、左様でござるか……」

うう……毎度のことながら、結構な毒舌だぜ。

「……ご、ごめんな。兄ちゃん、いつになっても料理上手くならな

く……」

「うづん、そんなのどうでもいいんだよ。私はフィー兄ちゃんと一緒に、こーやって食べられるだけで十分だもん」

「……り、リールう……」

俺は思わず感極まる。 やべ、涙出そう。

俺は必死に、必死にこらえてみた。……だが、残念ながらフィーニツトダムは決壊してしまった。

いま苦笑いした奴、あとで八つ裂きにしてやる。

「フィ、フィー兄ちゃん……？」

急いで涙を拭ってみたが、どうやら見られてしまったようだ。ああ、恥ずかしい……。でもさ、いまのはしょうがないよな？ 泣くなという方が無理って話だ。

だっていまの言葉は、俺を必要としてくれてるってことだろ？

俺が一方的にリールを必要としてるってことじゃなくて、リールも俺を必要としてくれてるってことだろ？

それは俺にとって 何よりも嬉しい最高の言葉だ。

今後の人生において、これを上回る感動はないんじゃないかと思うほどにな。

「リール、ありがとな……」

堕ちて破綻している俺は、いまの言葉だけで十分すぎるほどに救われたよ。

楽しい時間はすぐに終わる。

それは誰にとっても例外ではないだろう。だから俺にも当てはまるんだ。

今日も俺は、リールが寝静まったのを確認してから都会の方にやってきた。ターゲットというのは、どうしてもこっちにいるものなんだ。

来るのが面倒なんだよなあ。片道一時間近くかかるからさ。でも、それに見合った報酬があるし、何より住んでる場所から離れてるってのは結構重要なことだ。捕まるわけにはいかないからな。

さて、今日はどこから狙おうか。といっても、やはり上からになるわけなんだけどな。

俺はターゲットが泊まっているホテルの反対側のビルの屋上へ向かった。

ああ、寒い。やっぱり屋上寒い。でも俺だって学習はしている。今日は長袖長ズボンで来たんだ。昨日よりはマシだ。でもまだ寒い。屋上は手ごわいなー。

とふざけてもいられない。今日は昨日のみたいに、決まった時間にターゲットが来るわけじゃない。ターゲットはもう反対側のホテルの一室にいるんだ。だからタイミングが命。窓の近くに来たところを一撃で仕留めなきゃいけない。

難易度は昨日より難しいと思う。

俺はギターケースを開けて、さっそく狙撃の用意を始める。

まず三脚を組み立てて、次に銃を組み立てて、この二つをドッキングさせて固定。それから、ターゲットの泊まっている部屋に銃口を向けて、最後にスコープの標準と倍率を合わせる。

これでとりあえずは準備完了。

あとはひたすらスコープを覗いて、ターゲットが窓際に来るのを待つだけ。カーテンが閉まってるから、ホントにタイミング命だ。

……ああ、緊張してきた。

ターゲットが来る、来ない、来る、来ない、来る、来ないと引き金に指をかけてはやめ、かけてはやめを繰り返していると スコープで捉えているカーテンに人影が映った。

が、俺は引き金を引けなかった。

……くっ、タイミングを取り損ねた。……けど、ターゲットの部屋の構造を思い返す限り、ターゲットはいま、ベッドからどこかに移動したみたいなんだ。つまり、ターゲットはもう一度絶対に、カ

ーテンの前を通るはずだ。じゃないとベッドに戻れないからな。
だから、まだ大丈夫。次こそは 狙い撃つ。

神経を研ぎ澄ましてタイミングを計っていると、こんな時に限ってアイツが、毎度毎度俺を混乱させるアイツがやってきやがった……。

こんなことしていいのか？

こんなことしてなんになるんだ？

こんなことして正しいのか？

こんなことして誰か悲しまないか？

こんなことするのは間違ってると思わないのか？

こんなこと うるさい！ 邪魔すんな！ このタイミングで出てくるな！

……うるさい、か？ この声をうるさい呼ばわりするの？ お前を止めようとしているこの声をつるさい呼ばわりするの？

俺もだいたいぶ堕ちたなあ。いいの？ ……父さんと母さんが悲しむぞ？

……うるさい。リールのためだ……。

そのリールはどうだ？ 俺がこんなことをしていると知ったら……

……どうなるかな？ どう思うかな？ きつと嫌われるぞ？

そんなの知られなきゃいい。巻き込まなければいい。俺はそんなへまはしない！

そうか、さすがは俺。でもこの世の中そう上手いこ 黙れ消えろ！

瞬間 大気を切り裂く破裂音。

銃口からのろしのような煙が上がり、スコープを覗いていた俺の視界が真っ赤になった。

先ほどまでベージュっぽい色合いだったホテルのカーテンは、最初から真紅だったのではと思うほどに、それほどまでに鮮やかな赤に染まった。

……俺はまた、人を殺した。あの出血量なら確実だ。もしかした

ら首から上が消し飛んでるかもしれない。

今回はカーテンのおかげで、吐き気は襲ってこなかった。

だから早々に立ち去ろうと思う。俺にはうるたえてる暇なんてないんだ。

俺は銃を、三脚を、たったいま人を殺した奴とは思えない手際によさで片付ける。

一分も経たずに片付け終わると、俺は非常階段を駆け下りる。

難易度が高かった分、逃げるのは昨日よりもずいぶん楽だ。相手は一般人だったからな。黒服も何もいない。

そうして、何こともなく地上にたどり着いた俺は昨日と 　いつもと同じように都会の風景へと溶け込んだ。

もちろん、バンドの練習帰りのガキとして。

我が家に無事到着。

時間は昨日より早い。けど、高校生が帰ってくる時間とは思えないわけなんだがな。

玄関から静かに足を踏み入れると、我が家の落ち着いた匂い。これほど安心するものもない。

昨日と同じようにまず自分の部屋へ行き、ギターケースを隠す。

それから、リールの顔を拝みに行く。どれどれ、癒しをもらおうかねえ。

ホップ抜き足、ステップ差し足、ジャンプ忍び足を駆使して俺はリールの部屋に近づく。ドアの前に到達し、俺は「さてさて、うへ」と開けようとして 　ドアがちょっとだけ開いていることに気づく。

「ん？」

怪訝に思っていると、部屋の中から泣き声が聞こえてきた。

うわーんっていう大泣きじゃなくて、すすり泣くような、深夜に

聞くにはちよつと怖い声が聞こえてきた。

しかしそれは当然、幽霊なんていう存在し得ないものの声じゃない。

紛れもなく、リールの声だ。

俺は部屋に入るべきかどうか悩んで 入ることにした。ちよつとだけ開いているドアを二回ノックして、

「……リール、どうした？」

しかし、その声をかけても返事はなく、俺は勝手ながらドアを大きく開けて部屋の中へ。

すると、リールはベッドに座りながら泣いていた。

「どうした？ 何かあったのか？」

俺はリールのすぐ近くまで寄つたのち、しゃがみながら優しくそつ尋ねた。

「うう……えぐつ……ふい、ファイ兄ちゃん……っ！」

ドサツと、リールが俺に抱きついてきた。

いつもの俺なら嬉しいなあと顔がほころぶのだろうが、いまはまったくほころばなかった。俺にだってそういう心ぐらいは残ってる。

「ホントに、どうした……？」

そつ尋ねるしかなかった。赤ちゃんでもあやすかのようにリールの背中をぼんぽんと優しく叩きながら、俺はそつ尋ねるしかなかった。

「……あのね、さつきトイレに起きて……戻ってくる途中に、ファイ兄ちゃん寝てるかなつて思つて、部屋を覗いたらね、ファイ兄ちゃんが居なくて……それから家の中全部探したけど居なかったの……それで……」

やつと紡いでくれた言葉を聞いて、俺は顔をしかめた。

俺のせいじゃないか……リールが泣いてるの、俺のせいじゃないかよ……。何やってんだ、俺は……。リールを悲しませるのは、絶対のタブーなのに……。

早く安心させてやらないと……でもどうやって？

人を殺しに行つてたんだ、ごめんな。

なんて正直に言えるわけがない。そうなれば当然、嘘をつくしかない。リールに嘘をつくのは……嫌だけど、でも……そうするしかない。

「……ごめんな。目が覚めたから、ちよつと散歩に行つてただけだから心配すんな。もう絶対に居なくならないからな」

言いながら、俺はリールの小さな背中をさする。

体の震えが弱くなったことから察するに、リールはだいぶ落ち着きを取り戻してきたみたいだ。

「……ほんと？」

「ホントにホント、絶対居なくならない。だから今日はもう寝ような？」

「うん……」

満足したように頷くと、リールは自分でベッドに横たわった。

俺はリールの足元にあるタオルケットをかけてやった。

「じゃあリール、おやすみ」

「あ、フィー兄ちゃん、待って……」

部屋から出ようとした俺に、リールが声をかけてきた。

「ん、なんだ？」

「……あのねフィー兄ちゃん、今日……一緒に寝て……」

「えっ？」

いきなり言われてびっくりした。と同時に、飛び跳ねたいほどの嬉しさを覚えた。

で、でもなあ、嬉しいんだけど、ホントにもの凄く嬉しいんだけど……いい、一緒はちよつとなあ……さすがに恥ずかしいよなあ。

「フィー兄ちゃん……ダメ？」

上目遣いはダメーッ！ 断れなくなつちゃうよお！ って絶

対ダメだぞ俺！ 耐える！ 耐え抜くんだーっ！

「あ、あのさリール。俺つてば汗掻いたから、これからちよつとシャワー浴びてくるんだけど、だからそのあれだ……どうせ、俺が来

る前に寝てるだろ？」

リールの顔を見ると、いつでも寝れそうな目をしていて。まぶたを必死に開けて抵抗している感じだ。

「ま、待ってるもん……」

はつきりいつてもう寝そつだ。……きつと、俺が目の前に現れて安心したんだろうな。

「リール、無理しちゃダメだぞ？ 寝れる時に寝ないと美人になれないぞ？」

「いいもん。美人になれなくても……フィー兄ちゃんのこと、ずっと待ってる、もん……」

だとさ。しぶといですこと。まあ、リールの場合、いま寝なくたって美人ルートは確定なんだけどな。

しっかし、これはどうしたもんか。ちよつとまいっ……

あつ！ ひらめいたっ！

「リール！ 俺はここに自分のベッドを持つてくるのは無理だから、まあ……床で寝るから、それならどうだ？ リールが明日の朝目覚めた時に俺がここにいればいいだろ？ それとも、やっぱり……緒じゃなきゃダメか？」

「……じゃ……それで、いいい……」

お眠りになられました。

さてと、じゃあまずはシャワーを浴びてきますか。んで、そのあとに俺はかけ布団だけ持ってリールの部屋へ。

と、このあと俺は、その通りに動いたのち眠りについた。

なんか、最近では一番にぎやかな日だったかもしれないな、今日。

三章

「ぐぬう……！」
わたくしめことフィーニットの朝は、奇声を上げることから始まる。

奇声の理由は腹部の圧迫。

目を開けるまでもない。みなさんだってお分かりでしょう？

だってわたくしめは昨日、いや、寝たのは一時過ぎでしたから今日ですね。というわけで今日、わたくしめは自分の妹の部屋で寝たのですよ。　　ということはいやがたいでしょう？

わたくしめのお腹の上にいる可愛らしい人物の名前。

それをみんなで一緒に呼びましょう。せーのっ！

「リールう……」

寝起きだからでしょうか、心の中のようなテンションで声を張り上げることはできませんでした。

わたくしめは確かめるまでもない答えを確かめるために目を開けようと思います。

さてさて、今日はどんな白いパンツを穿いているので………え？ えっ？ ええ！

わたくしめの　　なんだこの口調！　もういい疲れた！
俺の腹部にいる人物はリールじゃなかった……

「……スリイナ、お前何してんの？」

えへへ、と笑う制服姿のスリイナ。

「えへへ、じゃねえよ。一回どいてくれ。というより、なんでお前なんだ？」

「リールちゃんが一回やってみればって言うから、つい……」

「ついじゃねえよ、ったく……。どつりでいつもより重いなあって

思っただよ」

そう言うと、スリイナは傷ついたような顔になり、俺からさっさと離れていった。

「お、重かった……？」

スリイナが泣きそうな顔で問いかけてくる。

ああ……めんどい。なんで自業自得の奴を俺が慰めなければならぬのだ。……でも確かに、重いつていうのはちよっとストレート過ぎて酷かったか？ ……しゃーねえな、それなりの撤回しますよ、すればいいんですよ。

「いや、重いつていうのはな、あくまでリールと比べての話だ。お前とリールじゃ背丈が違うんだからお前の方が重くて当たり前だろ？ それにあれだ、俺にしてみたらお前なんかまだまだ軽い方だったよ」

はっ！ どうだこのフォロー、完璧だぜ！

それを証拠に、スリイナは顔を素晴らしくにこやかに、それはもう美人の極みといっても差し支えないほどの笑顔を浮かべていた。
がしかし

「ほんと？ 軽い？ それってどのくらい？ キャビア何缶分？」

褒められたせいで調子に乗ったらしく、半ば暴走気味に質問してくるスリイナ。キャビア何缶分なんぞ知るか！

俺はうざいと思ったが、無視するとヒートアップすること請け合いなので、超面倒だと思いつながらもそれらの質問に答えてやることにした。ただし、一気にな。

俺は立ち上がり、スリイナに近寄っていく。

スリイナは俺のそんな行動を怒ったと判断したらしく、急に「ごめんねごめんね」と謝り始めてきた。

けど俺はそれを無視！ お前が二度とそんな馬鹿げた質問をしてこないようにするために、俺は心を鬼にするぜ！

俺は一步一步、スリイナへ近づいていく。

スリイナが自分から壁際まで下がっていったので、簡単に追い詰

めることができた。

俺はスリイナの体に手を伸ばす。

スリイナが顔を真つ赤にしているが俺は気にしない。

俺は左手でスリイナの太ももの裏を持つ。 あ、柔らかい。右

手は背中に戻す。 あ、これはブラのヒモですか？ そしてそ

のまま持ち上げる。あれだ、いわゆるゆお姫様抱っこって奴だ。

「いいか？ これがお前が軽いつていう証拠だ！ 分かったら、も

う二度と軽いかどうかなんてこと、俺に聞くなよ？」

「う、うん……」

うむうむ、分かったのなら降ろそう。

「それよりさ、朝食はできてるんだろうな？ できてるからこそ、

俺の上に乗っかってたんだろうな？」

もしできてないのにこんな遊びをしてたっていうのなら、俺はそ

のスカートをめくってやる。

「できてるよ。じゃあ下いこっか」

スリイナはそう言って、機嫌よさげに部屋から出て行った。

……まったく、空気を読めない子は嫌われるぞスリイナ。そこは

『あ、ごめん。まだできてないの……』 だろ。そしたら俺が『んだ

と！ 覚悟はできてんだろうな！ それい！』 と手を振り上げて、

最後にスリイナが『きゃっ！』 だろうがよ……。

ま、別にいいんだけどな。スリイナの下着の色は大方予想がつく。

ズバリ白だ。

なぜかって？ あんな純朴お嬢様が黒とかなわけないだろ？ そ

れにさ、昨日スリイナの谷間を拝見した時、下着の色は白だったん

だ。だから白だーっ！

って、俺は朝からなんちゅうことを考えてるんだ！

んー、これはもしかすると、マイケル症候群を発症したのかもし

れないな……。末期になると自らの服を引き裂いて全裸で街を闊歩

し始めるという恐ろしい病気だ。……ごめんなさい、こんな病気あ

りません。

なんて冗談はさておく。

リビングに向かうと、スリイナの言うとおり、きちんと朝食が用意されていた。しかも驚くなかれ、今日の朝食はなんと

フレンチトーストだった。

拍子抜けだ。

昨日よりもだいぶあっさりとした朝食は優雅に終了。

色々準備したのち、父さんと母さんの遺影にいつてきますの挨拶をして、俺たちは学校に出発した。

そして学校に到着すると、俺とリールは引き離される。

運命とは残酷なものだ。

今日はこれといって何もなかったとね。

現在はずでに放課後である。

たいぶ飛んだなあとか、できれば思わないで欲しい。一年は三六五日もあるのだ。その中に何も無い平穏な日がどれだけあると思ってるんだ？ 恐らく九割はそんな日だぞ。

で、今日はそういう日だったんだ。お伝えすることなど何も無い、平々凡々な日だったんだよ。もつと言えば、今日は『ストルス雑務店』も定休日。ホントに何も無い、のんびりとした日なのだ。

あっさりと残酷な運命から解放された俺は、スリイナと一緒に校門の前でリールを待っていた。

「フイー、あのさあ……」

そんな中、スリイナが口を開いた。

「何だ？」

「明日は土曜日でしょ？」

「そうだな」

「だからね……その、今日、うちに来ない？」

「いいぞ。何も無いしな」

「ほんとっ？」

「ああ、今日はホントに何も無い日だからな。それにここんところ忙しくてお前の家に全然行けてなかったし。久々にお前の家が見たいつてもんだ」

心からそう思う。なんども言っているが、スリイナはお嬢様だ。家だってバカみたいにでかいんだ。確実に俺の家の一〇倍はあるだろうな。ちなみに、俺の家は可もなく不可もない普通の大きさの家だ。でもその一〇倍って普通に凄いだろ？ んでもって、そんな家に行きたくないわけがないだろ？

だから俺はあっさりオーケーしたんだ。きつとリールも行きたいと思うだろうしな。

「じゃあ私、迎えを呼ぶね」

スリイナは携帯を取り出して電話をかけ始めた。

これで歩かずに済む。別に家までそんなに離れてないけど、一〇分近く歩きたいか歩きたくないかでいったら、そりゃ歩きたくないよな？

なんて考えていると、初等部の子供たちが校舎から出てきた。実にいいタイミングだな。さてさて、リールはどこだっ！

あ、いたーっ！

俺は恥ずかしげもなく手を振る。

リールも気づいて手を振り返してくれ……ん？ あれ？ 手を振り返してくる人数が明らかに多いんだけど？ 一、二、三、四……九人多い。九人……？

ああ、きつとあいつらだ。全員リールと比べて特徴が乏しいから分かりにくかったが 野球ボーイどもだ。

「よ。ここで一緒になるのは珍しいな」

近づいてきたガキどもに、俺は声をかけた。

「今日もボール入ったら取ってくださいよ？」

「はい残念でしたあ！ 今日は何でも屋がお休みの日でーすっ！」
俺はしたり顔で事実を告げた。…… 大人気ないな、俺。

「え？ そうなの？」

「そうなんだよ。お前らが利用し始めたのは三週間ぐらい前からだっけか？ ま、知らなくて無理ないかもな。今日は一ヶ月に一度の定休日だ」

休み少なさ！ って思ったろ？ でも、学校に行きながら、俺たち兄妹が生活をやっていけるくらい『ストルス雑務店』は稼いでると、スリイナを含めた近所の人たちに思わせるためには、このくらい働かないとダメなんだよ。

なんでそんなことを思わせる必要があるのかって言えば、前も言ったよな？ 殺し屋をやってるってことを隠すためだ。

大変って言えば大変だけど、つらいつてわけでもないし、哀れみはやめてくれよ？

「あーあ、今日は野球できないな……」

「玉拾いがいないと野球できないって、お前らだけボールなくす気なんだよっ！」

ガキどもは俺のそんな突っ込みを華麗にスルー。哀愁を漂わせながらトボトボと立ち去っていった。…… そんなに野球したいなら部活入れよ。そうすればボールとか盆栽とか気にする必要もなくなっ
て存分にプレーできるだろうによ。 って、そういえばそうだ、お前らなんで草野球で満足してんだよ！

声を大にして尋ねてみたかったが、そこまであいつらに興味があるわけでもない。だから心中のみでの疑問とさせてもらった。あしからずご了承してくれ。

まあ、そんなことより、

「リール、スリイナの家に行くか？ スリイナが誘ってくれたんだけど？」

このことをリールに教えていなかったじゃないか。ま、返事は聞くまでもないけどな。

「うん！ 行く行く！」

な？ 行きたいに決まってるんだよ。逆に行きたくない奴なんているのかね？

と考えていたその時

黒塗りの高級車 リムジンって奴が校門前に止まった。フォシルニクス家のお迎えが来たようだ。

運転席のドアが開き、紳士という言葉が似合うおじいさん執事登場。執事さんは俺たちの方まで回ってきて、わざわざドアを開けてくれた。凄いだろ？

「さ、スリーナお嬢様、お友達もどうぞ」

「フィーとリールちゃんからお先にどうぞ」

「いいのか？」

「いいからいいから！」

楽しそうに言うスリーナに背中を押されて、俺とリールはリムジンの中へ。

「広ーいっ！」

はしゃぐリール。別に俺もリールも乗ったのはこれが初めてじゃない。数回乗ったことがある。でも、それでもはしゃぐってこれだ。だって、俺もはしゃぎそうだもん。

もうそこら辺の車と全然違う。リールの言うとおり広い。これに尽きる。普通に寝れるもんな。暮らそうと思えば余裕で暮らせると思う。

そして、そんなミニキャンピングカーがついに発進した。目的地はフォシルニクス邸。車だったら二、三分で着くだろう。

だから別にやることはない。のんびりと、このつかの間の贅沢を味わうことにする。

むむ！ 残念ながら俺にはやる事ができた。この座席の感覚はまたいつかしっかりと味わえればそれでいい。いまは いまはやらなければならぬことがあるっ！

それが何かと言えば、ズバリ！ パンツを見ることだ。

俺の対面に座っているスリイナ。それを見て、朝の答え合わせをしなければならぬという使命感に襲われた。みなもの者、期待に応えようぞ！

ちなみにいま、スリイナの足はしつかりと閉じられている。無意識下での自動防御といったところだろうか。さすがはお嬢様だ。

だが　だがあしかしい！　こいつはお嬢様である前にちよつとアホなのだ。勉学の部分ではない。いわゆる天然って奴だ。

なので、こう言えば恐らく……

「　スリイナ！　足を開けっ！」

「え？　こ、こう？」

ほほ〜い！　やっぱり予想通りだ。早口の命令口調で言えば開くと思っただぜ！

ちなみに色の方も予想通りでした。え？　何かって？　だから白だよ白っ！

「うう、酷いよファイ……」

スリイナは足を内股にしてスカートを押さえつけるように手を置いていた。

こうされてしまっただけでは打つ手なし。完全防御状態だ。　ま、もう意味ないけどな。

「何が酷いんだよ。あんな命令で足開くスリイナだっただけの意味酷いだろ」

まあ、それを狙ったわけなんだけどな。

「だつてえ……あんなの卑怯だよ……」

……な、なんか、スリイナが可愛いぞ。なんだこの気持ちは……。ゾクゾクというか、胸の奥深くで何かが高ぶっている。　ハッ！

まさかSへの覚醒か！　この状況を楽しく感じるのは、そういうことなのかあ！　……で、でも俺は！　俺は自称ニューtralなんでそこんとこよろしくうーっ！

「じゃあお前も俺にやり返せばいいだろ？　確かにいまのは俺も悪かったかもしれないからな」

ほらな？ 俺ってニュートラルだから、今度はマゾになっただろ？

「やり返す？ それってどういう形でもいいの……？」

「いや、そりゃ限度つてもんをちゃんと設けてくれよ？ あと、痛いのはヤダぞ？」

あら、これはマゾあるまじき発言だな。でもいいんだ。だって俺はニュートラル。

「そんなことしないよ。でもそれ以外ならなんでもいい？」

「まあな……とりあえず体に害がなきゃなんだっていいよ。ほら、今日は休みだけど、明日からは仕事を再開するんだからな」

怪我して働けなくなるとホントに困るからな。

「そうだよな……じゃあ、害はないけど、でも強烈な仕返しを考えしておくからね」

「へいへい、せいぜい楽しみにしておきますよ」

吐き捨てるように言ったのち、俺はリールを見た。

リールは縦長の座席に横たわってゴロゴロとしていた。なんて愛らしいんだ！ そして白のパンツが見えているじゃないか！ なんとる幸運だ！ ありがたやあありがたやあ！

「フィー……」

横から死んだ魚を見るような視線が突き刺さってきた。

「な、何ドン引きしてんだよ！ いいだろ別に！ スリイナだって目の前にパンツがあつたら見るだろ？ そうだ、俺のを見せてやるよ。さっきのお返しだ」

「み、見せなくていいよお！ フィーのバカッ！」

怒っているからなのか、それとも恥ずかしいからなのか、とにかくスリイナは顔を真っ赤にしていた。

これ以上からかうのはちよつと危険と判断し、俺はお口にチャックを施した。

さあ、どうでしたでしょうか！ リムジンという限られた空間をどれだけ愉快的なステージへ変えられるかにチャレンジした今回！

スカートの中身当て！

座席のふかふかを存分に堪能！

リムジンの楽しみ方は 人それぞれさっ！

とまあ、急にまじめに入った理由は、リムジンがフォシルニクス邸に着いたからだ。

やっぱり車はいいな。早いし便利だ。父さんが死んでからは車に乗れなくなつたからさ、痛いほど分かるよ。この時代は車がないとダメだつてことがな。

とか思っていると、執事さんがドアを開けてくれた。スリイナが最初に降りて、俺、リールの順だ。

降りればそこは、まるでホテルの入り口。しかも、スリイナが帰ってきたからだろうか、出迎えが結構いる。まさにVIPがホテルにやってきた時のようだ。

中に入ればエントランスホール。てか、受付がないだけでホテルだね、ここ。

ホント久々に来たので、俺は首を右往左往させてお屋敷の中を見回す。鹿の首のはく製とか、それっぽいモノがたくさん飾られている。

「やっぱり凄いなスリイナの家は……つてあれ？」

スリイナに声をかけようとして、スリイナがいなくなっていることに気づく。

「スリイナ姉ちゃんはお着替えだつて」

どうやら、俺が色んなモノに目を奪われているうちに、現実では状況が変化していたらしい。

「じゃあ、俺たちはどうすれば……」

精神と時の部屋から出た時に近い感覚に襲われた俺は、別の意味で右往左往。

「こちらへどうぞ」

そんな俺に助け舟の如く、メイドさんが素晴らしい笑顔とともに声をかけてくれた。

この家のメイドさんの格好は、紺と白を基調とした、いわゆるク

ラシックスタイル。しかしながら、それを着ているメイドさんが中々に可愛いお人だ。……俺のメイドさんになつてはくれないだろうか？

妄想にふける俺と兄のそんな妄想を知る由もないリールは、清楚で可憐なメイドさんのあとに続いて奥へと進んでいく。

そうして案内された場所は、前にも通されたことがある客間だった。客間なのにうちのリビングよりもはるかに広いという、庶民にとっては存在するだけで嫌味を覚えさせられる空間だ。

俺とリールは、その空間の中央付近に鎮座する高級そうなソファに腰かけるよう促される。お言葉に甘えてリールと一緒に座ると、計ったようなタイミングで紅茶が出てきた。

味はなんだろうかと考えながら、俺は一口飲む。

「な……っ！」

俺は雷に打たれた避雷針の気分になった。

……れ、レモンティーだと！ なぜ俺の好みを知っている？

だ、だとすれば、リールのはミルクティーか！

俺はリールの持つティーカップを覗き込む。

レモンティーやん。……くそっ、サイコメトラーがいるんじゃないかという妙な深読みしてしまった俺がちよつと恥ずかしいじゃないか……。

一人で頬を染めながら、俺は新たな疑問を抱き始める。

……そういえば、これはインスタントなのか？ いや、この家はインスタントなんてもの自体が存在しないだろ。いや、もしかしたらその思い込みを利用して、実はインスタントを……いや、逆にそこまでの深読みをさらに読んで、あえて高級なものを出しているのではないか？ けどその逆も……。

と思考がカオスしかけたところに、

「フィー、どうしたの？」

スリイナの声が届いた。 ちょうどいい。インスタントなのかそうでないのか、この際スリイナに聞いてしまえ。

「あのさこの……………」

連ねていくはずだった俺の言葉は、序盤も序盤で止まってしまった。なんでかって？ 端的に言う……………思わず目を奪われたんだ。制服じゃないスリイナを見たのがかなり久々ということもあつたからか……………いや、例え毎日私服姿を見ていたとしても、これには目を奪われたことだろう。

スリイナの格好は白の長袖Tシャツに黒のベスト、下はデニムのホットパンツ。ニーソとかは穿いてなくて、生足が全開である。

俺がじーつと見ていたせいか、スリイナの顔が赤くなる。

「へ、変かな？」

もじもじとした態度でそう聞かれたので、俺は考えてみる。

変かどうか……………。別に変ではない。でもスリイナっぽくないと言えばスリイナっぽくない。スリイナは大人しいから、こういう服のイメージがまるでなかった。だって最後に見たスリイナの私服って、白のワンピースだぞ？ それは遠い記憶でもない。ほんの二、三週間前のことだ。

イメージとかけ離れた姿を見せられてどう答えればいいか迷った俺は、思わず最初に見た時の印象を口走ってしまった。

「エロい」

そう言った瞬間、俺のつま先に激痛が走る。リールによるゼロ距離かかと落としを食らったからだ。俺はあまりの痛さに悶える。……………ごめん、リール。でもこればかりはそう思っちゃうって。

悶えながらも、俺はしつかりとスリイナを捉え続ける。

エロい発言のせいか、スリイナの顔は赤に支配されていた。けど着替え直しに行くでもなく、隠すでもなく、ただその場に立っている。顔をよく見れば、恥ずかしさの中に嬉しさが混じってるように見えなくもない。

……………やはりスリイナは痴女なのだろうか？ その悩ましい太ももを俺に見せつけ、自分は密かに高揚感を抱いているということなのだろうか？

そこまで考えて、俺は頭を振る。

ないない、ありえない。長年見てきたけど、スリイナはそんな奴じゃない。嬉しさが混じってるように見えたのは俺の見間違いだろうな。

それよりもまず、エロい発言を撤回しないと。何しろルールが大層ご立腹みたいだし。

あとはまあ、スリイナの服装に対するちゃんとした感想も入れてやらないとな。せつかくオシヤレしたみたいだしさ。

「ごめんな。エロいは違うよな。エロいじゃなくて、意外だったよ。俺はもつと地味めの服で来るのかと思つてたからさ……でもそれが、その、いきなり大胆なので来たもんだから正直びっくりして……けど別に变ではないし、俺はその格好のお前……好きだけど」

「……好き？」

言葉のチヨイスを誤つてしまった！ 最後は『いいと思うけど』でシメるべきだった！ は、早く好き発言を取り消さないと！

「す、好きっていうのはさ、その格好が似合ってるって意味だ！へ、変な勘違いすんなよなっ！」

あれ？ こんな感じの台詞つて、普通、女の方が使うんじゃないか？ ……ま、いいか。

「……フィーつたら、照れちゃつてて可愛い……」

「う、うっせえ！ 照れてなんてねえよ！ スリイナこそ、自分の照れを棚に上げて何言つてやがる！ 照れたお前だつて可愛いぞ！」
「えっ」

ぎゃああああああああああああああああああああ！ 俺いまもの凄い変なこと言つたよなあ！ 勢いに任せ過ぎて、もの凄い変なこと言つちまつたよなあーっ！

……ああ、隠れる場所があるのなら、例え肥溜めの中でも構わないぜ……。心底そんな気分だ……。

その後、場は雑談タイムとなったのだが、俺とスリイナは初めて

のお見合いみたいな雰囲気になってしまって、ほとんど会話ができなかった。

リールがいなかったら気まずさで死んでいたかもしれない。

もしかして……あの気まずい空間こそが、スリイナの言っていた仕事返しだったのか？

いや、まあ、そう考えるにはあまりにもできすぎだとは思いつけど……。

でも仮に……もしそうだったのならば、確かにこれ以上ない強烈な仕返しだったぜ。

あ、そういえばレモンティーの正体聞いてない！

フォシルニクス邸からの帰り道、俺はそのことを思い出したなんてな、嘘だ。

……回りくどいこととしてごめんなさい。ちなみにレモンティーは絞ったりして作ったそうです。インスタントじゃなかったです。

うおっほん。では気を取り直して。

俺たち兄妹はまだスリイナの家だ。まだっていうか、今日は家に帰らない。

泊まってけだそうだ。

さっきまでの妙な雰囲気はなくなったし、明日の仕事は午後からだからということもあって、俺は了承した。リールもその方がよさそうだったからな。

それでいまは夕食中なんだが、やっぱり凄いね。何がって料理に決まっただけで、もうあれだね、レストラン、最高級のレストラン。夕食がコースで出てくるって凄くない？

まあ……だからって、雰囲気まで最高級レストランってわけじゃないんだけどな。

「あはははははっ！ フィーニット君！ 婿に入りなさい、婿に！」

こう言ったのは、縦長テーブルの先端　お誕生日席って言うのかな？　そこに座っているスリイナの親父さんだ。

親父といってもまだ若い。四〇手前ぐらいだった気がする。交友のあった父さんの話によれば、一代でこの家を築き上げた凄い人らしい。でも性格がちよっとおかしい。

ホント、親父さんは久々に会っても変わらないな……。ま、気にしない気にしない。

「も、もう、お父さんったら……」

と、いまの親父さんの発言を受けて頬を染める、俺の右隣のスリイナ。なんかお前、最近頬染めっぱなしだな。　てか、もうちょっと強く否定しろよ。

「でもスリイナはフィーニット君のことが好きなんだろう？　んー？

ほら言ってみなさい、ほら！」

なんだこいつ、最低だな。スリイナは俺のことなんて好きじゃないに決まってるんだろ。

「……………」

スリイナ！　なんか言え！　勝手に肯定されるぞ！

「そうかそうか！　やっぱりな！」

ほら見たことか！　ここは俺がビシツと言ってやらないと！

「親父さん、俺は婿になんか入りませんからね！」

「ん？　そうか……じゃあしょうがないな……」

なんだ、意外とあっさり……

「うん、しょうがない。スリイナ、お嫁に行きなさい」

んでだよっ！　なぜそうなるっ！

「親父さん、俺は婿には行かないし、お嫁も要りません！　大体なんでそんなに俺とスリイナをくつつけたがるんですか！」

「親として当然だろ？」

当然じゃないだろ！　そこは普通、手放したくない！　だろ！

俺だってリールをお嫁になんてやりたくないし。

……やっぱおかしいや、この人。新しいタイプの親バカとでもい

うのか……。

で、スリイナはスリイナでまだ赤くなってうつむいてるし。……いや、もしかしたら落ち込んでるのかもしれないな。俺と結婚とか言われてるんだし。幼なじみと結婚なんて冗談じゃないもんな。

「スリイナ、気にすんな。俺と結婚なんかしなくていいんだから」
冗談でも言うように明るく、けど親父さんに聞かれると面倒そうだから小さく声をかけた。

スリイナが慌ててなんか言おうとしてたけど、別にどうでもいい。たぶん、いや絶対に俺を気遣う言葉が、例えば『私は嫌じゃないよ』とかいう言葉が飛んでくるはずだからな。もう聞かなくなって分かる。

「ん？ フィーニツト君、スリイナになんて声をかけたんだい？
もしや、『あんな親父から言われなくても俺たち結婚するもんな』
っっって」

「違う！」
「じゃあなんだろうな？ そのあとのスリイナの慌てぶりからすると……『子供は一〇人がいいな』っっとか」
「ちげえよ！」

「一〇人は大変だ。スリイナ、頑張りなさい！」
無視！ 無視ですか！ 片手で小さくガッツポーズ作んなっっ！

「……はい」
はいじゃねええええええ！ 親父さんが何言ってるか分かってんのか！ ああもう限界だ！ キレていいはず！ 俺はキレていいはずだ！

「いいに加減しろよ、アンタ」
「こら！ 言葉遣いがだんだんひどくなってきてるよ。もっと年上を敬いなさい。まっったく、これだから最近の若者は……」

「す、すいません……」
出鼻をくじかれてしまった。なんだよ急に……。てか、敬われたいのならもっっとしっかりしてくれよ……。

「うんうん、分かればいいんだ。それより、一〇人はちょっと多いんじゃないかな？ 五人じゃダメかな？ まあ、孫がいつぱいっていうのは悪くはないんだけどね」

……もういい。もう無視無視。相手にしちゃダメだ。

俺は心を晴らすため、リールと会話することにした。首を左に向ける。

まあ可愛い！ でも心なしか不機嫌な気がする。……いままで相手をしていたなかったからかな？ それなら、いまからたぐっぶり相手をしてやるからな。

「リール、この」

「ふんっ！」

いつかみたいに効果音つきでそっぱを向かれた。ど、どど、どどうしよう……。

「あははは、リールちゃんに嫌われたね。スリイナに浮気するからだぞ？」

こ、こんの親父いいい！ いや、ダメダメだ！ これを手にしちやダメなんだ。また親父ペースになる。いまはとにかく、リールの機嫌をどうにかしないと……。

「リール。俺はどこにも行かないで、ずっとリールのそばにいるからな。結婚だつてしないし、お前を一人になんかしないからな」

そう言うと、リールはこちらに顔を向けてくれた。といつても、様子を窺うような感じで、ちゃんと見てくれてるわけじゃないけど。でも、これはあと一押しで機嫌を取り戻してくれるはずだ。さて、どんな言葉をかけようか。俺がそう模索していると、

「そうかそうか、やっぱリールちゃんもフィーニット君のことが好きなのか。あはははははっ、モテモテだね？ フィーニツ」

「そ、そんなんじゃないもん！」

リールが親父さんの台詞を遮る。そして、こちらにチラッとだけ向けていた顔を薄く染めたのち、さっきよりもひねりにひねってそっぱを向いた。一周回って俺の方を向きそうなレベルの逸らし具合

だ。

……ああ……せつかくこつち向かせたのに……お、親父の野郎がいらんこと言うから、リールの奴、恥ずかしがっちゃったじゃんよお……。

はあ……なんで俺ばかりこんな気まずい目に遭わなきゃいけないだよ……。神様、ちょっとばかりし理不尽だぞ……。

……まあ、俺なんかにはこのくらいの罰を与えてこそ、イーブンってことなんだろうけどな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4206z/>

大切なモノのために

2011年12月14日18時02分発行